F53
B67
F53-B67-67
12005007649 44

脊

外924
元

F53
1367
6

帝國圖書館藏
一死

廣瀨拙士譯

帝國圖書館藏

欠

缺頁 無文 請

H924

毎日聞いてゐるものなのだが、それでも私は理屈をつけて見た。兵隊達は英雄的だが、それは何故か。勇敢にも自己の生命を犠牲にするからだ。何故犠牲にするのか。自己の義務に對してだ。だが、義務とは何であるか。國法に服從することである。私はこの思想を掘り下げて見た。學者にはこれは何だらう？　事實の間にある恒久必然の繼續だ。もしオルデーグ先生がまだ生きてゐられたら、先生は英雄的といふことについて、隨分單純な定義を與へて下さつたことだらう。危險といふ一つの事實を提出され、また氣質、遺傳などの事實を出されて、胃が胃液を、膽囊が膽汁を、其の物質に出會すと分泌するやうに、教育が勇氣を分泌すると言はれ、私はそれを謹聽し、返辭さへ差控へたことであらう。しかし、そんな說明が與へてくれることよりも、心的現象はもつと複雜なものだと私は考へることであらう。私どもは胃が胃液を分泌しても、しないでも、膽囊が膽汁を分泌すると否とを審判することまではしない。勇氣を示す兵士と、卑怯を示す兵士とを私どもは批判する。私どもは唯その行爲を認識するばかりでなく、その品質を定める。私どもは甲に對しては尊敬熱情を感じ、乙に對しては侮蔑を感じる。これは何故か。

欠

侮蔑を感じるのは義務的のものである筈なのに、その行爲は必然でなく恒久でないからだ。私どもの意志の力を定める法則と、生理學的の力を定める法則との間にある差はこれである。一層この考を掘り下げて行く。義務には限界がある。それは私どもの能力の限界其物だ。如何なる隊長の命令も兵隊に海の中を進めと强ひることはできない。何故か。それはできないからだ。私どもの力は、だから、われらの義務を測定してゐる。例へば、私は前線の野戰病院の醫師となることは、私が不具な爲にできなかつた。私はさう成れなかつたことを自責する必要はない。私はこの病院で精一杯働くためだ。私は今度の戰爭に、私の力の調子を合せてゐる。私は義務を悉く果してゐるのではないか知ら。

二

いかに明かに私が醫者であり、醫者の業務を帶びてをり、いはゞ醫師といふ背景中にゐたとしても、何といふ變な方向に、私の反省の流れが漂つて行つたものだらう。精神的の問題に取り憑かれ、只管それを頭に置いてゐることが、戰時中の私の主要な特色だつたのだ。唯、その爲にこそ、私は白紙の帖面を取り上げ、わが思想を判然見定めるために、この種の記錄を編むことを始めたのであり、偶然が、此處で私を立會人にして、一續きの場面を悉く系統的に集めさせたのであつた。目下のところ、その奇異なことに吃驚して、私は言はゞそれを知的に見る力もないのだ。私は唯その悲痛なことしか感じなかつたのだ。間を置いてから、その抽象的の意義や、問題や、或は演說のためならば、その概要の價値を見ることができるだらうと信じる。幾度か、ボージョンで、手術臺を前にして、この痛ましい場面の主人公であつたオルテーグ先生其人が、私どもに繰返し

て語るのを直接聽いたことがある。その間に、私どもの中の一人は、患者に麻醉をかけ終つた時だつた。

「どの病人も眞の臨牀家にとつては、自然によつて設けられた一箇の實驗だよ！」

私が詳細のことを定着させようとしてゐる事件は、これもその實驗の一つで、それについて私の試みる物語も、その觀察談の一つであり、オルテーグ先生は、もつとこの種のものを澤山集めて置くやうにと忠告をされたのだつた。先生はどこまでも主張されたのだつた。「事實だ、事實を集めるんだ。何時も事實を」といふことだつた。マジァンヂー先生の言ふことは正しかつた。「學者は籠を背負つて手に鋏を持ち、科學の世界を歩き廻る紙屑屋に過ぎないのだつて、さうして見つけた物を拾ふのだ」さうだ。しかし、若し私の不幸な先生が、自分でパッシーの墓地に準備してゐた豪華な墓碑から、さうして、其處にはあの苦しんだ氣の毒な筋肉が、たうとう、永久の睡りを見つけた——モルヒネなしに——所から、再び出直して來たとしたら、この私の觀察は殆ど先生の氣には入らぬだらう。私が此處に記したいと思ふ事實は、宗教心理學の種類に屬するもので、

事實崇拜者には、そんなものは存在しなかつたのだらう。先生に宗教問題のことをはなすと、先生は大聲を出して快活に笑はれるのだつた。だから、先生からモリエールの『空想患者』の言葉をもぢつた「第一には淨化第二に哲學」といふ方式以外のことを引出さうとしても不可能だつたのだ。淨化するつて、何を淨化するのか。可能以上の一切の觀念、自然現象の中から、思想、意志、戀愛の痕跡を追究しようとする、いはゞ神祕性の不健全な隔世遺傳を除くことだつたのだ。先生はこの世に、況して人生に、神聖なものがあるとは認めなかつた。さう考へて、先生はマジァンヂーの「生(ムエ)の事實に理知を服從させること」といふ原理を信じて行くのだつた。先生は別箇の意味で、自分をあらゆる獨斷の敵だと、獨斷してゐることに氣づかないでゐた。先生は事實として、前もつて體系的に、何れ劣らぬ偏頗な正統主義からして選り出した現象しか承認してゐなかつたのだ。私は恐る恐る先生に向つて、宗教的事實も事實ですが、と言つて反對した。實驗主義から言へば、それを考慮することこそ科學的なのかも知れなかつた。すると、先生は繰返して、「第一に淨化するんだね、超自然といふことは存在しないよ、宇宙の中で

人間的意志を想定してゐることは、悉く無と定義さるべきものだよ。君が「神經系統がないのに、感じて歩いてゐる動物を見ました」つて言ふのだと、君の證據を試驗するまでもなく、その誤りを知ることができるよ……」といふ返事であつた。

多くの學者はオルテーグ先生のやうに理屈を言ふものだ。私も同じやうに理屈を言つた。私はこの數週間打突かつた程の現實に嘗て面と向つて出會したことはなかつた。この實證があつてから、超自然を、或はもつと正確にいへば、精神的のことを根本的に否定することは、あまり粗雑なことのやうに想つてゐる。科學も突詰めて行けば、一箇の假說に過ぎないのだ。その價値は現實を加減して感じられるのだ。醫學では――その點オルテーグ先生も明確ではなかつた――最も論理的な理論も、臨牀の方で否定されれば、早速駄目になり、臨牀家がそれを證明してくれゝば、最も筋道の立たぬことでも、悉く正確と認められるのだ。だから、結局行爲が眞理の最高の標準だ。單に示された事實によつても、科學的正統性と絶對に反對なある思想が、某々の人達に生活と適合し、これと反對に、科學的に正統な他のある事實がその適合を許さないといふことに決まれば、

それこそその科學的正統性は修正さるべきものだといふたしかな證據だ。現に此處にある觀察も、一つの場合に、事情こそ極めて特殊であるが、內的の意義からは甚だ普遍的な證據を突きつけるより他の目的はないのだ。もつと判然いへば、證明をするかといふにさうではない。かやうに目で見るから可能のことだとして示唆するのだ。學者としての私の良心がその觀察を書くことを要求するのだ。この觀察は眞理が含まれてゐれば、それを引出すために實驗を集めたものなのだ。先刻私は私の思想の中を判然見ると言つた。その正直なところが、私ども學究人の誠意のあるところだ。オルテーグ先生はこの文章を讀んで、「僕には君の考がよく解るよ、君の父はモンペリエーの哲學教授だつたのだ。隔世遺傳論者に揉みに揉まれた形而上學者だつたのだ。君の母は實行的のカトリック信者だつた。君は君の遺傳の公準を解決する問題を取上げたのだらう？　でも、第一には淨化だよ」と返辭をされることだらう。しかし、何んな學者だつて、その人の遺傳が作り上げた腦以外の機械を用ひて働いた人があるだらうか。問題全部は、その機械によつて得られた成績が、それ自身として價値があるか、何うかを知ることだ。私がこ

の覺書を書くといふのは、取りも直さず、こんな冒險の中にある私の人間的なところと、すべての見物人には同一であるかも知れぬところの、打壞すことのできない實證的の糟とをよく區別しようと思ふからだ。

三

事實に關することだから、眞直に事實につくことにしよう。さうしてまづ第一に、この私立の療養所を一九一四年八月始め頃、補助病院に改造したことから始めよう。それは急速なことであつた。八月一日に動員令の揭示があると、すぐに決定されたことだ。翌日オルテーグ先生はラ・ロシェルの鐵工造船所の富豪の所長モロー・ジァンヴィルに會見した。先生はこの產業王の息子が、自動車事故による瀕死の狀態にあつたのを、極めて大膽な顱頂骨の手術を行つて助けたことがあつた。モロー・ジァンヴィルは、自分が會長となつてゐる冶金學會の名に於て、戰爭期間中この軍の療養所に要る費用の支出を同意した。この約束をもつて、先生は陸軍省に駈けつけ、サン・ギョーム街の家をヴァル・ド・グラース病院に附屬することゝし、一屆完全に其處の長となつてゐたいことを請願した。彼はその許可を得て、それから數日後の八月五日の水曜日に、必要な改

造に取り掛かつた。先生は、このきびきびした實行を大小一切の行爲に應用してゐたのだつた。それこそ本當の、完全な言葉の意味での、手と術といふ二語から成立つ外科醫(シルリヤヌス)の先生だつた。先生にとつては、思惟するといふことは、取も直さず行爲をすることであつた。すべての彼の人格中に、直接と間接とはあつた。先生が手術をする時には、その細面が白布のマスクに埋まつて、注意の鋭さと、天賦と、全人格の緊張とで、人々を驚かしたものだつた。その非常にしなやかで、器用で、ゴムの手袋をはめてゐる長い指の、ひどく力强い、また非常な微妙さで、その操つてゐる鋼鐵のメスの先端(さき)まで、先生の實に活き活きしたところがよく見受けられた。それに解剖上の眼力の、實に確實なことだつた。小さく、細く、淺黑い薄茶色の熱のある瞳が、彼全體の見かけのやうに、華奢な骨と、長い間極めて黑かつた頭髮、外國の殆ど異鄕的な間隔遺傳を洩らしてゐた。しかし彼の父は、何でもないバイヨンヌの公證人であつたのだ。けれども、名前が西班牙系の家柄から出てゐることを告げてゐた。ピレネの反對側には、オルテガといふ植物學者があつて、この人によつてクリヨフィン類の或る植物をオルテギアと命名さへした

のがあるくらゐではないか。

「僕は別に生き殘らうとは思はない。大なり、小なり、科學的發見に僕の名がついてゐるのだから。マドリッドの僕の同性者が、一種の植物とか、アヂソン、デュシェーヌ・ド・ブーローニュブライトなどのやうに、ある病氣の併發症狀を決定するとなれば、それこそ科學其物と同じやうに、永久に存續することで、それでこそ唯一の不朽性だ」と好んでいふのであつた。

この科學についての先生の熱烈な愛——神聖な外科とさへ言つた——それこそ千一夜物語から脫け出てアラビアの魔法師の痩型の命令的なやうな横顏は、この人の眞の姿であつた。先生はそれに實に何か知ら東洋的のところのある豪華の趣味熱情を加へてゐた。神經系統の外科の先生には驚くべきこの性格的特色が、その顏を眺めると當然のやうに想はれた。そのエタ・ジュニ廣場の邸宅は、家具、織物、武具、敷物、大理石、ブロンズなどの珍しいものゝ一杯詰まつた博物館に他ならぬものであつた。彼は其處に何れも選り拔きの畫を二十枚許り、わが國にはよく代表されてゐない西班牙派の中から、偶然

の結果からのものもあるが、また遺傳的の本能から選んだものが集められてゐた。カタラン・ド・サン・ジョルジュ、ジャコマール・バリー、リュイ・ダルモー、ジョルジュ・イングレなどと言つた獨特派として知られてゐるこれらの藝術家の名前が、名高い教授の客に親しみのあるものとなつてゐた。待合室の中を往つたり來たりして、客の誰彼は、畫布なり畫板なりに相應はしい古い額縁の下につけてある花枠に記入された、當惑の綴文字を、手間をかけて漸く綴ることができるのであつた。更に古典的な名前も其處に見受けられた。オルテーグ先生はズルバランの聖女ユルシュールの黄色と紅の裝ひをした氣持のいゝ作や、ムリリョの聖フランソア、ヴェラスケースの騎馬兵のスケッチ、ゴヤの闘牛師などを所有してゐた。それと共に室の中には素晴しい花の贅澤なのや、揃つたものばかりの生活、仕着せの召使、平たい皿、それにまだ三臺の自動車などあつた。このアラビア式魔法師は、フランス座やオペラ座に觀劇の日には一階棧敷を取つて置き、何の舞臺稽古の時にも棧敷を占めてゐるといふ巴里ッ子化した巴里人であつた。私は彼を千一夜物語の一人物に比較した。精神的には、彼は寧ろファウスト博士と對になる人

で、人生のあらゆる歡樂に憧れ、それを悉く握つてゐるのであつた。私ども彼の弟子達に與へられた異常な魅力は、この二重性、卽ち王様のやうな生活をしてゐる科學王といふところから來るのだつた。私どもには彼は成功の化身其物のやうに見えた。四十歳でコンクールに華々しい成功を收めた後に、教授となり、種々の名譽を有つてゐた。彼には思想もあつた。光榮もあつた。金もあつた。噂によると、年に百萬フランを作つてゐたのだ。あの怖ろしい病氣までは、先生は永久の若々しさがあつた。彼は四十四歳で、誰にもその結婚を可笑しいと想はせずに、二十歳の花嫁を貰つたのだ。その花嫁も、クロード・ベルナール先生の愛弟子であつた生理學者マルファン・トレヴィス氏の令嬢で、醫學界に有名な身分であつた。その年に――それは結婚が一九〇八年だつたから、近いことであつたが、また非常に遠いことだ――オルテーグ教授夫妻は、何かの會に、劇場に、或は博覽會に出席するごとに、必ず嫉妬でないまでも、年上の良人の心臓を自慢で鼓動させるやうな、あの賞讃の注意を惹き起さないことはなかつた。

四

その夫人が、先生の許嫁でしかなかつた時、先生が非常に幸福でゐられたのに、今日の夫人は、打つて變つて非常に不幸な日を過してゐられるので、私は繰返して昔を偲ぶために、今しも一寸この筆を摑いたくらゐだ。それにしてもあんな意外だつた事件をどんな調子で告げることにしたらいゝのだらう！　いづれにせよ、あんな率直な熱心さでは、迚も容れがたい幸福の夢を先生はあたりに漂はせてゐられたのだ。

「さうだ、マルサル君、僕は結婚するんだ。理想を見つけたよ。君は理解してくれるね、理想を。君カトリーヌに會つてくれたら、僕を理解ができよう。僕は彼女を幼名で呼ぶのだ。僕は彼女の實に高尚なことを知つたよ。そしてこの冬、彼女を發見したのだ。僕は、時にわが身に問うて見るくらゐだよ。自分は馬鹿だつたのかつて？　彼女は僕以外の者とさへ結婚できるところだつたのさ……だが、君會つて見てくれよ……。」

マルファン・トレヴィス嬢は、この昂奮を頷かせるに十分だつた。二十歳で、背の高い、しとやかな若々しい令嬢で、けばけばした顏でない、殆ど古典的の輪廓の、純粹な、映る時ブロンドになる栗色の髪を戴き、氣高い、きりつとしたその顏つきは、情熱と同時に、莊重と優雅さとが漂つてゐた。中にも、ぱつちりした、驚いたやうな目は、眞面目な落ちつきを見せた灰色の瞳の眼ざしから、底の知れない、我を抑へた感じのするものだつた。憩うた時の反省の口許が、笑ふ時は初々しくなつて、稍ゝ膨れ氣味の唇は、輝かしい齒並を見せ、その健康色は、まだ纖弱い身に、生理的の力の、風にも當らぬ上品さをあらはし、結婚と幸福とに入つて、婦人の將來の、盛りの季節を仄めかすものがあつた。それに何か知ら集中したあるものが、その美しい面にあり、知つてゐる人々には一種悲痛の美さへ加はつてゐるやうだつた。――オルテーグ先生は、早速私にそれを敎へたのだつた。――何たる試煉を彼女は受けたことであつたらう。その父は殊に氣の毒な條件の下に、町の眞中で災難に襲はれて死に、母はその一年後に再婚したが、これも父同樣の氣の毒な條件の下にであつた。マルファン・トレヴィス嬢が古い昔の關係を

たよつたことはあまりに明かなことだつた。若い娘は、その母の家に入つて、心に冷めたさを抱いた。多分彼女は、母の善くなかつたことを悟つてはゐなかつたらうが、それを感じてはゐたのだ。この精神的の孤獨に對するあはれみの情が、一部分オルテーグ先生の愛情の中に入つてゐたか、それとも、一九〇八年にまだ承知のできた結婚に年齢のあんな不釣合を救すための口實となつたかも知れぬ。しかし、十年後なり、二十年後には？　痛々しい境遇の極にあつたのを助けられた孤兒がこの救ひ主の懐に飛びこんだ飛躍の中に、感謝のあつたことだつたらうか。オルテーグ先生の名譽に對して、その人格の天才的な力に對して、または父を慕ふ心の中に、父の身にあつた記憶の中に殘つてゐたのと同じやうな優越さが、彼女の上に働き、その魅力に對して、彼女がオルテーグ先生を愛したのか。尠くとも私が持つてゐる一つの實證は、その結婚が彼女にとつて、オルテーグ先生にとつてと同樣に、理性からのことではなく、引きづられてのことであつて、その若い令嬢の情熱は、式に列つた人々の間に異口同音であつた程の巧みさであらはされてゐたのであつた。

「でもね、新婦の方が、先生の愛情よりも以上に、愛情があるのだらうからね！」

五

私が物語を始める當時の、卽ち七年後の一九一四年八月始め頃も、彼女はまだ相變らずさうであつたらうか。戀愛が、もつと忠實らしい、あらゆる犧牲に對して、より多く準備された、しかし、別の種類の感情に、その席を讓りはしなかつたか。何故この問ひが、私どもの戰時病院開設準備をしてゐる間の、八月の待機の日の間に、尠からぬ力をもつて私に迫つて來たのだらうか。オルテーグ夫人はこの仕事を主宰したかつたのだつた。私が殆ど時間といふ時間の全部、隔てなく夫人に近づいたのは、この時が最初であつた。彼女は絕えず部屋や廊下を往來し、あれ程何時も美しいのが、看護婦の純白の服を着て一層美しかつた。彼女を一層良人に近く關係させた仕事に、勤勉であつたことの中に、同時にその仕事を果して行く樣子の中に、彼女が變へたことのない一つの證據を私は發見すべき筈だつた。確かにオルテーグ先生は、彼女のために存在した唯一の人で

あつた。內勤の人達、將校達、私自身に對しても、彼女は嘗て身嗜みを忘れたことはなかつた。それどころか、實に療養所の細心の改修について、教授の指令遂行に從事されたのだつた。踵のない白い靴に入れた儘であつた華奢な細い足は、疲れも知らずに大階段の石段を上下し、藥種屋から唐物屋へ、手術室から消毒室へと走り廻つてゐられた。一切、最早指環の光つてゐなかつた細いその指で、——婚約の指環さへなく、赤十字の小さな徽章を前掛にピンで留めて——酸素水の罎や、クロロホルムの小罎や、封印された管の包みを解いたり、負傷兵の下着を分類したり、繃帶の卷物、綿の包みを積み重ねたり、繃帶卷の車や、メスの道具などから光つた玻璃箱の檢査までもするのであつた。彼女は何も知らないで私どもの嚴肅な仕事の細々したことにまで立入つた。彼女がこの方面に無知であつたことは、外科の先生が、家庭と職業的の仕事の嚴重な部分との間に設けてゐた限界の、どんなものだつたかを洩らすものであつた。彼女はこゝに熱心を披瀝し、それがまた如何に彼女がこの重大時局に、良人の愛國的活動に協力することを大切なことゝしてゐたかを證據だてるものであつた。その熱中した準備仕事は、俄にベル

ギーへ獨軍殺到の最初の報知と伴つて、殊に不吉な想像を喚起するものであつた。慈善的に私どもの仕事に志願した他の看護婦達は、まづそれに戰慄をした。オルテーグ夫人はさうでなかつた。教授がまだ空席の病院を訪ねた時、教授の顏を窺つたその眼さしに、良人を滿足させようといふ一念だけが彼女にあるのを人々は察した。先生が苛々する時——嘗ては自分の神經をよく抑へたのに、あまり屢〻であつた——心配さうな顏をしてゐた彼女が、良人の

「結構！　大變結構！」

と言つた時、慰められて、顏を晴々さす程なのを私は見受けた。かやうな欲望、かやうな要求、誰かを滿足させようといふかやうな渴望が、戀愛からであり、しかも、幸福な戀愛からであるやうに想はれるのだつた。何う言つていゝか譯の解らぬ直觀で、そんな徵候があるにも拘らず、何故か私はこの二人の間にかくれた悲劇のあること——斷つて置くが、二人の間に子供はなかつた——私どもの知らぬ中に、將來の驚きまでに、無意識の奧深い煩悶の中に、行はれることのあるあの心の悲劇の一つを豫感してゐたことで

あつたらう。ある直觀であつたらうか。さうではない。一つの證據で、唯、單に七年間——正確には六箇年半——形式結婚の手續を了つてから第十六區の區役所の中庭で、彼が鼓吹した情熱を、オルテーグ先生の同僚や弟子達が羨んだのを私が耳にした時から、經過した月日だけの證據だ。私の不思議な先生は、宗教的結婚に君は來てはくれないかと質ねられたことがあつた。

「これは家内の母に對してする讓步で、この地盤では一生始めてのことだ。僕はしかしそれを尊敬はしないね。僕は眞の友人達、僕の心の友人、その中に君を算へてゐるが、その友人達が僕を教會で、しかも、眞實でない態度をしてゐるのを見て貰ひたくはないが……」

かやうに私に語つた人は、四十四歳にも拘らず、まだ若かつた。しかし、五十一歳足らずで、一九一四年八月のミシェル・オルテーグ先生は、もはや殆ど老人であつた。去る冬の頃から、私は彼の相貌が徐々に恒に變化しつゝあるのを氣づいてゐた。彼は痩せつゝあつた。顏がこけて來た。本來淺黑い色艶が一層色になつた。四月に、次に六月

に、勞苦から來る二度の熱病で黄色い跡が殘つた。その輕い黄疸が關節や掌に痕跡を止めてゐた。頭の髪と髭とが白くなつた。しかし、彼は依然として動き廻り、元氣であつた。彼には精力が幾度も甦つた。で、他方で、私は彼に非常に愛着してゐたのだつた。多少經驗がある臨牀醫家には、彼の樣子の中に既に刻まれてゐた怖しい眞理を私は見たくなかつた。私は飽くまでもその二度の黄疸を偶發的なものだと考へることにした。私は彼の衰弱を過勞の行爲だといふ、まことに都合の良い重寶な、無知の遁辭で說明してゐた。安心するために、私は頭の中でこの狂的な勉强家の日課の一日を繰返して考へた。午前はサルペートリエール病院、其處には特別の仕事が彼のために聖ギョーム街に設けてあつた。次に正午までの手術、日によつては診察に押掛けてゐる患者を門前に待たせてあり、或は市中の得意客の家を駈け廻り、夕方は社交、或は劇場で、尙その上に講義の準備、その講義其物は獨自の覺書を編纂することだつた。尙、時には田舍や外國に、絶望的の患者から招かれて旅行に出ることもあつた。驚いたことには、オルテーグ先生はその過勞にそれまで抵抗して來たのだ。だが、何といふ衰へが先生の體全體に見え出

したことだつたらう。

主人の身の上に次第に目立つて來た老衰と、夫人の次第に華やかに見える若々しさとの對照が、際立つて療養所の部屋の無遠慮な日の光がそれをよく認めさせた。以前私はそれ程のこととは識別けてゐなかつた。その家の飾り立てた廣間の豪奢な陰影の中で、オルテーグ先生の衰弱した顏が、肖像畫の强い特色を止めてはゐた。しかし、療養所の遮るものゝない明るい光の上では、もはや唯、名殘りの人影にしか過ぎなかつた。これと反對に、つやつやした頰と額と、物優しい眉、惱ましくなく微笑の漂つてゐる唇、襟元の淸らかな線をしてゐる彼女は、白い露出しの壁の間に、花の魅力を見せてゐたのだ。夫妻は互に寄り添つて、暗示的なこの背景の中で、一倍惡い皮肉な惡人にも、また僕のやうな崇拜してゐる者にも、これが、悲哀、恐怖、不信を示唆するのを承知してゐられたらう。屹度かの女は、それにちつとも氣がついてゐなかつたのだ。彼女は唯單に、先生に對する心づくしの忠實さで、時には强ひて、良人に椅子をすゝめたり、時には、風に當らないやう窓を閉めたり、また時には、歸宅して休息することを促すのであつた。

だが、オルテーグ先生は？　今の私の記憶の戻つてゐた頃、幾度か、若い夫人に先生の注がれた眼ざしの中に、極めて奇怪な表情のあることを觀察した。其處には悲歎、露骨な、殆ど殘酷な、詰問が讀めるやうに想はれた。久しい間傑出した人物であり、そして早老したこの人が、かやうに美しい、わが物であつた二十六歳の眞盛りにある彼女を眺めて、しかも、それが戰爭の負傷者を待つてゐるのが、到る所にありあり見える外科的環境の中だと、既にそれが國民悲劇の遠景（バック）の上に出た一箇のプライベートの悲劇のやうなものであつた。私はそれを前もつて見てゐた。むしろ私は繰返していふが、直觀によつて、原因を通して結果を捉へる不快な卜者らしく、悼ましい大事を豫感してゐたのだ。すべては過ぎ去る。恰もある時には、現實感が、われらの官能のどれよりも、またわれらの理性其物よりも、敏く目覺めることがあるやうであつた。それはまた無意識のことで、知られないだけに一層鋭い思想、恐らくこの精神的の環境と人間の心との通ふといふ、正統科學も承認しない環境的心靈現象とでもいふものだつた。けれども、それが何を認めるのか。さうして、それを人間の實相について測つて見ると、何といふ貧弱なこ

とだらう！　これは十分正しいのか。この別箇のことは、「天地には人間の哲學で理解できないことが澤山ある」といふことは。

六

今私はこんなに豫感した悲劇の、本題に入る端緒となつた挿話のところに來た。それは最後までフランスの怖ろしい大悲劇と並行して發展すべきものだつた。私は直接見てゐた全く心の中の事件から、深い意義を取出して見ると、今筆を執つてゐる時まで續いてゐる莫大なこの世の試煉について、一つの教訓をよく看取することができさうだ。しかし、事實から、しかも、事實だけから出て來る筈の結論について豫想することはすまい。頃は、大戰勃發の八月の上旬中旬だつた。戰爭は十日前から宣言された。ヴァル・ド・グラース病院本部から要求された四十の寢臺數を滿たすための、補充の十五の寢臺は設備された。歴史的の大事件で、私どもは熱病に罹つたやうな不安の裡に生活してゐた。時間は長いと同時に、非常に短かくおもはれた。待機の日限はまだ終つてゐなかつた。それに事變の起つた時は、さう早く湧き出たことに不思議とおもふ程、事變は巨き

いものだつた。私どもは當初或種の希望を覺えた。唯、オルテーグ先生は異つた意見であつた。私はその正しかつたことを先生のために明かにすべきである。私には別だつたが、先生は誰にも、持論の悲觀說をかくしてゐられた。伯林で催された外科大會に私は先生に隨行したことがあつた。先生はその時の印象を喚び起し、

「あのドイツ人といふ奴は怖ろしく組織好きの奴だ。一九〇四年に、君は覺えてゐるだらうが、僕達の視察したドイツについてさへ吃驚して歸つて來たのだ。奴等は十年以上も準備をしてゐるのだ。さうして、我々は何もしないで十年以上既に若干を經たのだ。結論を下して、見給へ。」

「先生は精神力とその自然發生力を零だとお考へですか。私どもがアルザスに入つた時のことを御覽なさい。」

「奴等が熱中してゐるといふだけさ。精神力の事つて言へば、まあ君、自動車に打突かつて見給へ！」

次に先生の痩せた面は引緊まつて、肩を聳やかし、

「こんなお喋べりをしたつて何になるかね？　醫師の職業は眞理を知ることだが、尤も患者にはそれをかくすのだ。」

この知らぬ顏をすることは、觀察をするよりも口にする方が氣樂であつた。イタリー人は、平凡だがよく穿つた諺の「齒が痛む時は舌が働く」といふのを有つてゐる。オルテーグ先生はドイツ文化の科學性の讃美を態々口にされても駄目だつた。一切の範圍に於て、熱心に無意識といふことを先生は主張されるのだつたが、先生は、やはり、無意識、情熱的のフランス人であつた。先生はドイツのベルギー侵入と、最初の侵略に對して、憤慨を爆發させないでは、誰にも話をされることがなかつた。以前は新聞一つを讀む暇さへ殆どなかつた先生が、十も十二も十五も新聞を買つて、直ぐそれを擴げるが、不完全か不純な眞理しか見えないのに裏切られては棄てられるのであつた。

朝發行したことが夕刊に取消を出してあるのを見せてあげると、先生は言はれた。

「若し新聞が確實に知つてゐることのみ告げるのだつたら、新聞は眞白になつて、檢閲の必要もなからう。だが、我々は翌日になれば正確な報道があるのだ。君はよく僕の家

内の從弟に當るエルネスト・ル・ガリックを御承知かね。君は僕の家で晩餐の時、彼のサン・シール學生時分會つたことがあつた。今は步兵聯隊の中尉だ。彼はアルザスにゐた。ある使命で數時間巴里に來るさうだ。通知によると、汽車に乘る前に、療養所に僕等に敬意を表しに來るつてことだ。よく出來た兵隊さんで、任務のことを喋舌ることはしない、從つて、普信としては貧弱だが、その調子だけで、僕達はどんなに事件が進んでゐるか感じられるよ。」

事實、私はエタ・ジュニ廣場の豪奢な食卓の端に、サン・シール士官學校の制服をつけた青年が、毎度ゐたのを見たことがある。オルテーグ先生のやうな軍人に緣の薄い家では、かなり不思議な姿だつた。その小心の無器用な姿が、私の記憶に殘つてゐた。私はその人の聲を殆ど聞いたことはなかつた。彼が家のどんな親類であるかを私は知つてゐた。といふのは、慣例の晩餐の後に、外科方面でオルテーグ先生の競爭者二人の人と一緒に引上げたことがあり、その會話を聽いて、二人が妹妬の氣持を和げるのを不快に思はないでもなかつたことがある。

「あの従弟は何時も彼處にゐるのかね。」
「よく君はそれを言ふね！　でも、それは當り前よ。カトリーヌ・オルテーグさんの母はフェルリコー家の令嬢だし、あの少年ル・ガリックの母も、フェルリコー家の出だからね。その婦人は死んだんだ。この人達のことは何でも知つてるよ。それはトレギエーの人だし、僕はラニオン人だからね。」
「それは何うでもいゝ。僕がこの天才友人のやうに、二十五も若い婦人と結婚すると、ふ馬鹿をしないと、家内に若い従弟もないよ。君はこの歌を覺えてゐるか……？
「覺えてゐるよ、そいつは若返らせてくれるね。當直室にゐるやうだ。」
と他方は笑ひながら答へた。すると、彼はロずさみ出した。

われらは三人デパートの娘
笑ひの好きな善い娘
銘々若いいとこがあつた
送つてくれる若いいとこよ……

この人々の口の悪い推察が、幾分従姉に對する士官學校生の態度を觀察させるものであつた。それまで彼が一種の狃々しさを伴つてゐるからつて、唯尊敬しか私は識別してゐなかつた。若い兩人は隔てのない幼馴染の親しげな言葉づきであつた。その代りに、オルテーグ先生は親身なところがあつて、一切嫉妬めいたものを慎んでゐられのが目立つた。我の強い先生は、極く些細の機嫌不機嫌をかくすのが拙かつた。人の身の上を想ふことが多ければ多いだけ、關心をもつてゐる人々に熱心で、反感を示すことも益ゝ遠慮なくなり、親分肌から急に眞の獨裁家らしい人格を、成すことごとに強化される癖があつた。

七

私がその性格の特色について有つてゐた知識が、あのラニオンの同郷人が言つたやうに、若いル・ガリックのした訪問の時、危く見當違ひの方向に投げ込まれさうであつた。士官が療養所のオルテーグ先生の事務室に入つた時、丁度私は其處にゐた。オルテーグ夫人も其處にゐた。

私どもは教授に向つて精しい仕事の仔細を報告最中であつた。その際先生は殆ど病的の苛々しさであつた。それは約束と違つて、仕入商が屆けて寄越した、大量過ぎるクロロホルムの送狀についてのことであつた。その苛々してゐることは、殆ど氣を悪くした仕草の中にまだ殘つてゐた。そんな様子の際に、來客があつたので、先生は頭を擡げて最初の言葉からして罵倒の皮肉のやうに、

「君か、エルネスト……、戰爭で大得意だね、顔に出てゐるよ！……」

この紛ぎらはしい挨拶は、若い中尉の様子に相應しいものでなかつた。その元氣のいい色んな點から、その鍛へた體の態度から、力と喜びをも匂はしてゐたにしても、その力の、またその喜びの原理は、健康以外にあつたのであつた。もうすれ切れた軍服で、戰爭の最初からの燒けた色艶で、何となく緊張と同時に、柔軟さが一寸した擧動の中にもあつて、本當に戰爭の危險から來て、また危險な所へ戻つて行く勞働者といつた印象を與へてゐた。その透き通つたブルターニュの瞳は、從姉の青緣がかつた灰色の目のそれに類して、焰に燃えてゐた。しかし、それは生活の幸福な熱ではなく、腹の据つた意志の强さであつた。前の士官學校時代の動搖した未完成の顏が、全く男らしくなり、和らいでゐた。その容貌の單純さと纏まつてゐるところは――もつと正しい言葉が見つからないが――完全に自己と一致した人間だといふことを告げてゐた。ル・ガリックは廣い額と、ツンとした鼻と、長めの目と、眞直な眉と、引緊つた莊重な口をもつてゐた。短かく刈つた髪の下に剃り立ての顏は尙一層汚れのないやうに見えた。中背の彼は、安全の示唆が彼から發してゐさうな程、極めて軍人らしいところを見せてゐた。

オルテーグ先生の刺すやうな言葉に答へて、「それは僕が非常に幸福だからですよ、兄さん、私は素晴しい日を送つて來たところです。アルザスへの侵入は我々軍人が感じたやうに非常に感激的のものでした。砲火の前に伴れて行かれないでは、フランス人はどんな者か解りません。それにもはや火は熱したのです。確かです。僕たちには、事件が二つあつたです——何處でといふ譯にはまゐりませんが——しかし、其處は眞劍な急速なものでした……！　それが同じ調子で行けば、間もなくわが軍がラインを渡つたといふことをお聞きになる日も近いでせう。」

「さう言ふのを聞くと、ほんとに善いことね。」

とオルテーグ夫人は言つて、教授を振返り、

「ねえ、あなた悲觀主義者なんてことは間違つてゐたぢやありませんの。」

「兄さん、悲觀論者なのですか……」

士官は聞き訊した。

「それは兄さんに似合ひませんね。僕がリオンで準備を完成してた時は、見ていたゞき

たかつた。傳令が言つて來ました。中尉殿、戰爭に行くのは愉快ではありませんかつて、さうだとも、でお前は？　えゝ私ですか、中尉殿に跟いてなら何處でもうれしいです。それに今度は勝ちますよと言ふのです。これが僕たちの兵です。解りましたか。兄さん僕たちは勝ちます。屹度です、何故かと仰つしやるのですか。それはあなた方には解らんですが、僕はそれを明瞭に解してゐるので默つてゐられません。フランスが負けたら亡びて了ひます。が、カトリックの大國ですから亡びる筈はないんです。その政府如何に拘らず、選擧民、法律、新聞、一切に拘らずさうです。で、リオン出發前に僕たちは彌撒をしました。殆ど聯隊全部がそれに出席したのです。過半は聖體拜領までしました。この彌撒は同僚の一人が唱へたのでした。實際これは誇らしい印象を與へたものです。白麻の僧服の襞の下に、兵の眞紅のズボンを穿いてゐました。兎に角兄さん、奇蹟でしたよ。あなたには迚も信じられないですが、背嚢を背負つて、宗教退治をする筈だつたものが、軍隊の中で、こんな宗教宣傳をしたといふことはです！　數日前でした。僕達が始めて敵と遭遇した時、大の信者であつた大佐殿が隊の者どもに言つたのです。

「諸君、神の赦しを受けたい者は跪坐くのだ。神父さんが彌撒を與へて下さるから」つて。こんな話をするにはしますが、兄さん、あなたを改宗させようつてことではありません。御承知の通り、かういふことを敢てあなたに申上げるのではないですが、あなたもこの戰爭を見て行かれるでせう。で、今から私は自分の見たことをお傳へしたいのです。實驗しか信じないあなたは、こんな實驗にも目を塞がないで下さい。お願ひです。僕達は勝つのです、神が僕達と一緒にゐらせられるのですから。」

オルテーグ先生は齒の片隅で髭の先を咬みながら、言葉を遮りもしないで、その話を聽いてゐた。先生のこの癖は神經の昂ぶつた時、例へば午前の手術を受けた患者が、午後は意外の熱になつてゐるのを認めた時などの例であつた。熱心な信仰のこの告白に對して、先生は自分の外科の道具の刄と同じやうな切味のいゝ調子で答へた。

「君、われらが勝利者だといふのは、唯十分に優秀な大砲、最良の銃、優れた將軍、最良の兵士があるからだ。」

次に相手の樣子を見て、ちらと冷笑を浮べ、詩を讀む暇はない人だから、學生時代に

屹度覺えたらしい詩を二行引用して議論を打切つた。

この話はやめませう、あなたと私
頭が違ひますと、マルドシュが言つた……。

さうして、急に夫人の方に向いて、

「カトリーヌ、このクロロホルムの件は片付けるんだね、マルサル君がその整理の手紙を口授するから、二重に打つてね……　さうだ君、ル・ガリック君の從姉さんは、こんな商賣機具を叩くことを覺えたところだ。」

先生はタイプライターを見せた。

「家内は戰爭中療養所で祕書役をするのだ。見られる通り、各自係は異ふが、皆勤めるのだ。このサン・ギョーム街は、皆俗人だとはいへ、所長夫妻を始め看護婦に至るまで、よく、しかも、有益な仕事ができるのだ。ところで、君は僕達にくれる時間が多少あるだらう。設備を見せてあげよう、惡くはないよ。」

彼は士官を引張つて出た。士官は先生の後に跟いて行つた。廊下で引續いて話す聲が

聞えた。

「一々の戸を見て呉れ、花を描かして、その花によつて部屋の名をつけたんだ。石竹の室、リラの室、薔薇の室……だ。この善い名前がグリルを想ひついた聖ローランや、或は、防腐療法を考へつかなかつた聖ラーブルのそれに相當しはしないかね？……」

八

オルテーグ夫人はその話の中で、私と同じ不安を確かに感じてゐた。その醫學生らしい冷笑と皮肉は、傑れた人物に似合しくなかつた。しかも、それは誰にしたところで似合しくないことであつた！　ル・ガリックの宗教の信仰を打明けるところが、如何に無邪氣に見えても戰爭をして來たところであつた。生命を賭けた勇氣は、尊敬しなければならぬ義理はないにしても、確信のあまりにも誠實なことを保證するものであつた。オルテーグ先生が包みかくせなかつた不快の念は、その相手の神祕的な打明話から來たものではなかつた。講堂や研究室で全然決定的否定型になつてゐる學者は、子供や、狂人に對してできない以上に、信仰のある者に對して、我慢ができなかつたのだ。さうして、言葉ではなく、唯ル・ガリックが席にゐることが、あの苛々しさを惹起したのだ。何故か？　その疑問に對して、非常な煩悶に捉はれてゐるのが見えてゐたオルテーグ夫人こ

そ、有理らし過ぎる程の返答を洩したのだつた。不正仕入商人に對する手紙を口授してゐる間に、彼女の手は慄へてゐた。タイプを叩く間にある障碍や、打直しが、キーを外れる指の失策の如くに現はれてゐた。老いた良人に較べて、綺麗な面白い從弟が、この夫人の心の中に强烈すぎる悔恨の情を起こさせたのか。この時にはさうかと想つた。しかし、若しさうであつたら、確かに彼女はこの事を告白したくはない筈だつた。といふのは、彼女が突然、印刷紙を器械から取出した時、發した質問の中に、絶對に彼女の眞實なところを、私は感じたからであつた。

「良人は私の從弟に對して隨分失禮だつたのね。マルサルさん、あなたも氣がついたでせう！　否と仰しやるな。あなたの顏に驚きが見えましたわ。でも、あの人は彼を大變愛してゐるんですの。今朝も私に非常に愛情をもつて話したのですわ。唯……」

彼女は躊躇つた。

「あの人は今でも極些細のことにも肝癪を起すのです。それも時には調子外れです。例へば、この送狀の間違だつて、何でもない事でございますのに……。」

夫人はまた躊躇つた。

「あの人は以前何時も變らぬ性格でした。變つたのですね。今も變つてゐます。私にはよくそれが見えるのです。全く肉體的のことです。精神的、知的には相變らず。ですから、私はあの人の健康を心配するのですよ。醫者でゐらつしやり、隨分以前から御承知のあなたは、何ういふお考へでいらつしやいます？」

私は答へた。

「隨分お働きですからね、多分過勞です。それに時局の重大さが……」

「さうですね。私もそれを思つて心配です。繰返して言ひますが、心配ですわ。病氣、それもひどいのではないかと心配です。私はあの人に食事をさせることができないのですよ。怖ろしく痩せてまゐりましてね。黄疸になつてからのことです。すつかり、あの病氣が取れてゐる樣子はございませんでせう。」

夫人が段々私に問ひ訊すのが進むにつれて、その眼は私に注がれ、私を探り、益々大きく目を開き、驚きを增して、例よりも嚴肅になつて、心の中に喰ひ入るのであつた。

今度は私の方が、知らないでも、知つてゐても、堪へがたいある眞理を知りたいのと、その怖しさとが同様に共處に讀めるのだつた。私もオルテーグ先生のあまりに明白すぎる變化にありさうな説明として、怖しい一つの臆説が目に見えるやうだつた。現はれると、直ぐ斥けられてゐたその觀念を、この夫人の大きくなり行く苦しみが、再び私に強制して來るのであつた。さうして、よく考へて見ると、その警戒の叫びに共鳴してゐることに吃驚した。

「實際、心配になる時も隨分ございます……」

「さうでせう！」

痙攣を起したやうに、私の腕をつかんで、

「何うしたんでせう？　すつかり話して下さい。私、すつかりお伺ひする勇氣がございます。」

私の無益な、うつかりした、醫學的にはあまりにも正しくない白狀が、夫人を駭かせたのが、却て怖しくなつて、私は答へた。

「私は訊ねたことも、先生を診察したことも一度だつてありません。」

「では尋ねて下さい、診察して下さい。良い診察も時さへ失はなければ、災難の來るのを妨げるものだつて、あなたが誰にもお話しになるのを常々伺ひましたわ……。」

「奥様、そんなことを仰しやいますな、お考へになつちや可けません……。」

と、私は强く遮ぎつた。

「私を安心させて下さるのは貴方次第です。御自身だつて、知りたいとお思ひでありませんか。と申すのは、あなたは主人を思つて下さるのですもの。幾度かあなたは主人を愛することをお見せになります。あなただつて、この不安は堪へがたい筈ですわ。」

「ですが、先生の御性格では、御存知でいらつしやるでせう、そんなことをお伺ひしては……」

「大變むつかしいつて仰しやるの？　さうですわ、解ります。私、唯試みていたゞきたいのでございます……。」

と遮ぎつて夫人は言つた。私は夫人の不安を示されたのに負けて言つた。

「承知いたしました。試みませう。」
「今日ね！」
夫人は命令的であつた。
「今日こそ私も主人に申さねばなりません。一刻も遲れては危險なのでしたら、延ばしたつて何になりませう？　それに存じてゐます。主人は今日全然自制のない調子ですから、多分話すでせう！」
「奥様、かしこまりました。今日にも試みませう……。」
夫人は眼つきで私を制し、廊下の方向に頭を傾けて耳を澄ましたのであつた。夫人の烈しい昂奮は、まだ私には聽へない物音まで氣づかせるのであつた。彼女はまだ抑へてゐた私の手を放し、さうして、態と笑ひ聲の高い聲で、しかし、其處に私は彼女の心臟が鼓動するのを感じてゐた。
「私、何を考へてゐたんでせう。このコピーは誤字だらけでした。先生が歸つて來た時、あまり叱られないやうに遣り直しませう。」

彼女は器械に白紙をさしこんで、小さなキーがチクタクと勢よく走り出した時、扉が開くのを聞いた。オルテーグ先生はル・ガリックを伴れて戻つて來た。オルテーグ夫人は素知らぬ顏をしようとしたにも拘らず、狼狽へたので、實は唯夫人だけが芝居を演じてゐて、別箇の感情から起きた煩悶であつたのを、良人に對する心配のせいにしたのではなかつたかとしか考へられなかつた。けれども、オルテーグ先生の外見は、あまりにも最惡の惧れを首肯かせるものとするのだつた。非常に元氣で、輕快な若い士官の姿と並んで現れた虛弱な彼の姿は、一層痛ましく見え、明白に、最後の近いことの徵候が印されてゐた。一段と黄色い、例よりも枯れたやうな顏が、恰も鋭い苦痛の激變が、即時にも彼を死に走らせるのではないかと言つたやうに顰められてゐた。痩せ衰へたその體は前屈みになり、兩手を凹い腹の上に固く握りしめてゐた。それでも氣の強い彼は、微笑を浮べて、夫人に近づき語りだした。
「ル・ガリックの驚きかたは、あんたにも面白かつたらうよ。こんな設備になつてゐやうとは、夢にも想つてゐなかつたんだ。僕にではなく、あんたに祝辭を言つてくれと言

つといた。この十日前から、本當に療養所を改造したのはあんただつた。古い寺の中に兵士の寢室といふ考は、旨い考だつた。」

「いかにもさうです。カトリーヌさん、教授と姉さんとはこの畫板の裝飾、瑞々しいこの庭、立派な老樹、綠の芝生、どの窓の下にも花の茂つてゐる理想的の野戰病院を作り上げたんですね。」

と言つて、それから眞顏になり、調子を變へて、

「唯一つあなた方の病院に批難することがあります。それは死ぬにしては、むしろあまりよく出來すぎてゐることでせう。」

「幸にエルネスト君、君が衞生隊でなかつたことだ。」

と今度はオルテーグ先生が立直つて言つた。明かに激痛の强さが感じられてゐた。さうして、これも眞面目になつて、變な肯定のやうだが、

「苦痛は決して十分に包めないよ。僕の決めてゐることは、絕望的の症狀に對しては、善良なモルヒネ前へ進め！だ。といふのは、結局苦むといふことは何にもならんからね

「償ひです。」

と、ル・ガリックも同じ深い眞理の調子で答へた。

「何を償ふのか？」

「それは我々の過去をです。」

ル・ガリックはかう言つて、少時ためらつてから附加へた。

「それと他人の過ちをです。」

オルテーグ先生は言つた。

「我々の過ちはいゝとして、しかしだね！……」

彼も亦逡巡つた。それから苦々しさうに、

「我々の過ちか？さも命が欲しさうだね！　では、生命を無理に與へた者は、如何なる權利で、それを理解することを要求するのかね？……」

さうして、熱情的に、

「だが、他人の過ち？」

繰返して、

「他人のか？　そいつは怖しいことだ！……御免よ、エルネスト、怒つたのなら……」

「怒りはしません。心配なんです。一切が苦痛と死に結局なるやうに、苦痛と死も償ひといふ意味がないものなら、どんな意味を有つてゐますか、生命にどんな意味がありますか？」

「何もないよ。」

と先生は言つた。

一時沈默があつた。明日彈丸に中るかも知れぬ士官の前で、この軍病院の室で、明かに重大な病氣に罹つてゐる人の口から洩れた言葉は、隨分異樣な響を立てた。その言葉を洩した人こそ困つたくらゐだつた。彼は續けた。

「君が大尉に昇進してレジオン・ドノール勳章を貰つて歸つて來たら、哲學と宗教を論じよう。さうして、僕が君の信仰を遺憾としないやうに、又僕の無信仰を遺憾としないでくれたまへ。腦が同じ組織でないからつて、愛し合ひ、尊敬し合ふ邪魔にならんもの

だ。承知してくれるだらうと思ふが、僕は君を大に愛してゐる。また大變尊敬してゐる。今勇氣のある快活な君に會ふ前にも、君が戰場であらゆる義務を、當然以上につくすことを確信してゐたよ。だが、君は忙がしいのだから左樣ならにしよう。成功してくれたまへ。毎度通信を賴むよ、端書でも澤山寄こしてくれたまへ……。カトリーヌ、從弟を見送つてあげてくれ。序に藥種屋に立寄つて見てくれ。監督する必要のある着荷が種々ある筈だ。僕はマルサル君と、あんたの手紙を見直して校正をする。エルネスト君、左樣なら。僕は御免蒙るよ……。」

九

戸口でオルテーグ夫人は振返つた。夫人の投げた視線には、「試みてくれ」といふ意味が讀めた。その妻としての苦痛の眼ざし、エルネスト・ル・ガリックの、全く態とらしくない、從姉と一緒に出て行く姿、率直に隔てのない別離の情を見せた先生の様子、そのすべてが、最初の私の推察を取消してしまつた。後になつて、これら種々の場面のかくれた矛盾を私は了解したのだ。オルテーグ夫人は、もはや戀愛でない。唯いとしさ、感謝の念で良人を愛し、それも口にすることはしないで、且、その健康の謎に、あまり酷く心痛して、第三者の感情に氣を配ることがなかつたのだつた。第三者のエルネスト・ル・ガリックは、從姉を戀ひながら、あまり長く感情を抑へて愛人となることもできず、それに熱心な宗教心から、この最後の訪問にそんな言葉を一言でも洩して、罪の人になることはしないで、僅に沈默の訣れとしたのだつた。最後にオルテーグ先生は、悲痛な

秘密を打消し、士官の無躾な程の若々しさと、自分の衰へとを比較し、胸の血のにじむ儘に、嫉妬よりも羨ましさの念に堪へず、で、彼を夫人の側から引離して他へ伴れて行くといふ、けちな動作さへしたのだつた。彼は既にそれを赤面してゐた。この裏面の消息が今日では私にはつきりしてゐるが、その刹那には、唯一つの印象が支配してゐた。私の探る機會と、彼の氣むづかしさといふ印象だけのことであつた。先生が舊の場所へ戻つて、突然洩された内心の煩悶は、先生としては賢明に利用されたものであつた。それだのに何うして診察のことを云ひ出せやうか。先生の人柄は私に催眠術をかけたやうで、敢て言ひ出さうにも臆して空虚になつてゐた。

「カトリーヌの言ふ通りだつた。本當に多過ぎる程誤謬がある。」

と、先生は最初のコピーに目を走らせて言はれた。二度目のは未完でタイプに架けた儘であつた。先生の言葉は、部屋に入らうとした時、夫人の言葉を耳にしてゐられた證據だつた。先生は附加へて、

「彼女は實際何處へ頭をやつてゐたのかね？」

と言はれた。

先生のやつれた面に先刻のと同じ畳み顔があつた。又しても漠然ながら鋭い不安の痛みを感じてゐられたのだつた。私はそれを直感したが、机の上で手に凭りかゝつて座してゐられたその姿勢が、全く肉體的の苦痛を現はし、それが殆どかくされてゐなかつたので、私は覺えず叫んだ。

「お悪いのですか？　先生。」

「何故？」

と返事をして、先生のアラビア式のやうな頭を擡げられた。それは毎度例のある偉さうな態度であつた。私は水に飛び込んだつもりで畳みかけて言つた。

「お苦しさうですから、十分前に歸つていらした時も、手を此處にかうやつてお出でゝした。」

私は胸の下に拳をあてゝ前屈みになつて、先生の姿勢の眞似をした。

先生は起上りながら、聲が變つてゐた。

「あゝ、それに氣がついたかね？」

先生は部屋の中を二足三足歩かれた。それから眞直に私の方に來て、私の肩に手を置き、ぢつと私を見つめて、

「マルサル君、僕が君にする打明話を絶對に内密にして、誰にも、殊に家内に話さないといふ約束をしてくれるかね……」

「先生、そんなお約束はできません。伺はない中ですが、先生は容態を仰しやるのでございませう？……」

「さうだ。」

と驚いたやうな先生の言葉であつた。

「ですが、唯今お質ねしましたのも、奥様が御健康を心配してゐらつしやるからです。この問題について、お伺ひするやうにとお頼みになつたのは奥様ですから……。」

「彼女もか。」

と、胸を裂くやうな調子で言はれた。先生は兩手で顔を壓へ、しばらく苦悶の痙攣にか

かつてゐられた。氣を取直してから、これまで、極めて危險な手術中に、屢々見せられたことのある、意志の焰によつて輝いた口、眼、額を見せながら、

「それはさうあるべき事だ。彼女が君に質ねた時、唯君は病氣だとはおもふがといふこと、何處が惡いか知らぬといふ約束なら何時でもできよう。怖しい言葉をいつてはいけない。一切、明瞭にはいはぬことだけを約束したまへ。僕は、君に至急いふ必要があるのだ。それも、この條件つきでないと言へぬのだ……。」

さういつて、オルテーグ先生の言葉は全く嘆願するやうであつた。

「マルサル君、死者には權利がある。僕は今死につゝあるのだ……。」

「先生そんなことはありません、全くです……」

と私は叫んだ。

「さうだ。が、約束するか？」

と私を遮つて言はれた。

「約束いたします。」

口ごもりながら先生は言はれた。

「有難う！」

と、先生は明かに氣が休まつたやうに言はれた。

「君、僕は三箇月と生きてゐられないのだ。」

手振りで私をとめて、

「君自身で診察してくれたまへ。」

診察用の安樂椅子が、小さな室の片隅にあつた。先生はそれに横になり、チョッキを弛め、膝を立てゝ、私の手を執り、

「ね、其處だ、脇腹の下だ、觸つて御覽、肝臓の端が解るだらう。栗のやうな小さな核があるのでね？　さうか？　今度は膽嚢を探つて見給へ？……あるか？　もう働いてゐない膽汁からできた梨子狀の腫物がわかるだらう。クールヴォアジェー・テリテーの徵候を思ひ出すだらう。膽嚢が脹れてゐる。だから、算へるまでもない。廢したまへ……。」

先生は私の手を拂ひ除けて起直られた。一時、喰をしば叩いてゐられた。

「御迷惑でございました。」

次第に氣が遠くなるやうになつて、私は叫んだのであつた。

「君こそだ。だが、新生物によつて神經網が冒されてね。」

彼は胸椎骨の最後のものゝ高さの所を示して、

「此處だよ、痛いのは、刺すやうな、引裂くやうな、深い痛みだ。體を前に、君が注目したやうに、屈んで、始めて聊か和ぐのだ。僕一人の時は、射たれた犬のやうに、長椅子の上に寢るのだ。それがいゝのだ。その餘の症狀は略すよ。あまり辛いよ。僕はそれを一々觀察したのだ。君は僕の黄疸を覺えてゐるね？　あれは輕い消えやすいものだつた。あれは間歇的だ。他のものと合して間違ひはない。マルサル君、僕は膵臓の頭の所で癌に冒されてるんだ。駄目だ。」

大學での最も喝采をされた先生の授業中の言葉に、これ以上の明晰、視線にこれ以上の斷定的な、これ以上の肯定的のことはなかつた。その「駄目だ」といふ言葉を聽いた時、ペテルに向つて、同じ言葉でわが身自身の徴候をかいつまんで話したトルツソー先

生を憶ひ出した。ペテルの語つたあの諦めた哀みを、私は目の前に見たのだ。それはトルツソー先生のそれであつた。これはオルテーグ先生のものだつた。忘れることのできないこの瞬間の、科學的の確證が、天才の外科醫に對して、昔のストア哲學が力を取出したあの理知的の朗かさを與へたのだつた。トルツソーのやうに、內科病理の一章の證明をわが身に見るだけにして、先生は自己の運命から解脫してゐられた。先生の診斷から、ペテルがトルツソー先生のそれを疑はなかつたことを更に私は疑はなかつた。この現在の場合に、數學的の證明をもつてすべての意味を敎へる暗號電信の通信紙のやうなものであつた。私のしてゐた、それよりも、近頃私の內部でできてゐた漠とした觀察が、不吉にも確實な日の光に照し出されたのだつた。學者のあの英雄的な、無慈悲な精神で議論することすら、私は試みたことがなかつた。敢ていへば、私はその場で驚嘆して呆れてゐた。オルテーグ先生のその告白後に、俄に冷靜になられたことが、莊嚴といふところまで、感激的の偉大さを身に纏はれたやうだつた。私は先生の手を取つて、言葉もなく握りしめた。先生は又もや「有難う」といふ意味の目つきで私に抱擁を返され、さ

うして、引續いて、

「あの可哀さうなル・ガリックがおめでたい樂觀說をひけらかしに來た時、たつた今、腹立しさともいふべき動作をしたが、君はその理由を解つてくれるだらう。神經系統の ない精神論など呆れたものだが、それはまだ勘辨できる。解剖をした經驗はないのだ。だが、彼は戰場から來て、戰場へまた引返すのだ。戰爭といふ怖しい言葉が、この數日前から恐怖の幻に飜譯され、しかも、その現實を知つてゐるのだ。手足が飛び、腹も射たれ、頭蓋は酷い目に會ひ、昔の野性が自由に人間の裡に放たれて、あらゆる殘忍なこと、叫び、吼え、しやくり、息切れ、尙最後には屍體までをも見てゐるのだ。さて、彼はその忌むべき事柄から何も學ばず、何一つ言はない快漢なのだ。彼はその事實によつて何の理屈も言はず、嘗てそんな事に會ひもしなかつたやうだ。彼は唯神の善意の事を語りに來たやうだ。彼自身は若く、壯健な、立派な男だ。君も見た通りだ。彼は明日にも殺されるかも知れぬ。で、今のところ、彼のやうな青年がヨーロッパに何百萬もをるのだ。學說から君と僕とは、極めて簡單にこの現象を人間の動物的起原から、原始的の

大類人猿が文化の中に再現したことで說明する。しかし、彼はだね、——君は聞いたらう——彼は完全全能の存在たる神を裁定者だと固く信じてゐるのだ。彼は流血にも神の正義と善意とを見出してゐるのだ。オテル・ティウの病院に勤務してゐる同僚を一人知つてゐるが、この男はこんな事を言つて宗教に篤い婆さんを驚かして喜んでゐる。「神樣があるんだから、刑罰を課せられても宜いだらう」とさ。マルサル君、この男は道理のあることを言つてゐるんだ。といふのは、神があるとしたら、さうして、僕の場合を取るよ……。何だつて？　神は善良、正義で、さうして、僕ミシエル・オルテーダを作り、五十歳で金も出來、有名になり、尊敬する女と結婚し、一生の間に氣の毒な者を慰め、死刑にされたやうな者を全快させたが、それは一切の幸福を無殘に奪はれたとするかね？　神經外科醫は正にそれ以外の者ではない。今こそ僕が一番役に立つ時かも知れぬ。それが病氣に襲はれたんだ！　この近代的の軍備では、腦に、脊髓に負傷する者がこの戰爭にはどの他の戰爭よりも夥しいだらう。さうして、人々が死に、人々が痲痺し、白痴になり、盲人になることだらう。それといふのも、その人々を救ふ苦のミシエル・オ

ルテーグ自身も、何によつて起つたか知れぬ、譯の分らぬ癌で死ぬからではないか。僕と同僚のサルヴァンと一緒に診察に往つてゐた時、最も馬鹿げた事故で自動車のタイヤが割れ、ヴェルサイユの近郊で車が顚倒した。君にはその記憶があるだらう。當時各新聞が事件を報道したものだ。運轉手は何事もなく、サルヴァンも何事もなく、僕は腹部の內側に强い打擊を受けた。僕には屹度前から定まつた運命だつたんだ。さうして、今この體だ！」

今先生の聲の中には、激昂が唸つてゐた。また、宗教の慰安といふと、殆ど個人的の腹立たしい、何時も反抗と憎惡の感が、先生にこれ迄もあつたことを知つてゐた。で、私は沈默を續けてゐた。先刻私は、怖しい診斷に對して先生の立派な態度を感じ入つたものの、今は最早その診斷の悲劇的な點しか感じてゐなかつた。順もあらうに、それをこの惡魔的な戰爭の脅威の始めの中に見たといふことが、死に襲はれながら、しかも、それを自覺してゐる有名な外科醫のこの悲慘事に、一層酷い性質を附加するのであつた。打ち寄せる波のやうな氣の毒だといふ念が、私の心の底から迸つて、私は先生の手を再

び取つて衝動的に繰返して言つた。

「お可哀相に先生！　お可哀相さうに……」

今度は先生が手を引込められた。先生は我慢のならぬやうに頭を振られた。氣の毒がられることは、先生にとつて非常に厭であつた。一瞬間前の科學觀同樣に、誇りの念が同じ力を出したのだ。さうして、再び己に克つて、言ひかけたことを終らうとして、

「マルサル君、僕は子供のやうなことを、しかも、ル・ガリックと同じに馬鹿げたことを言つたよ。世の中には決定的なことは何もないんだから、理窟に合はんこともないのだ。しかし、現象の同時に並立してゐることを捉へないで、二つの流れが交叉する時に、その交叉を偶然といふのだ。われらは神祕といふ語を口にすることもある。偶然は死のこと以外に神祕ではない。實はそれも知らぬのだ。それはさうとして、僕がこの打明話をしたのは、君にお願ひが一つあつたからだ。金錢問題で用件となることではないのだ。僕は澤山儲けもしたが使ひもした。僕は情熱をもつて生活を愛した。僕は科學に盡したと同じやうに、飽くまでも享樂をしようと念つたんだ。自己に完全人の型を實現し、何

にかけても時代の王者とならうとしたのだ。僕は何も當てにしなかつた。力の自信があり、明日ありと確信してゐたからだ。それが僕から遁げるんだ。五萬フランの仕事でお仕舞ひだ。この病院で多少でも働ければそれだけのことだ。それも何週間かね？　僕は多少荒つぽい投資をしたんだが、この苦惱で危くなりかけてゐる。僕の財産で一番確かなものは、この聖ギョーム街の邸宅だが、幸にこの冬支拂を濟ました所だ。それとこの療養所、僕のクリニックだ。僕が逝つたら、これが何うなるかね？　僕がゐなくなつたら、マルサル君、君が僕の家内のために此處を守つてくれぬと困る。カトリーヌに逼息した生活をさせるのは、僕に殘酷すぎるよ。この家を旨くやつて、一旦時局が終れば、これだけで彼女に十分獨立ができるだらう。その牧入と僕の保險金を合せると、エタジュニ廣場の住居を退去しないでも濟む。切詰めないでやつて行ける筈だ。それには誰かこの療養所に獻身的に働く、腕もあり、誠實な人が要るのだ。その人になつてくれないかね？　直ぐ返事をせんでもいゝ。これは問題だからね。駄目を押して置くが、勿論君の取るべき利益も考へてある。原則として君が承知してくれるなら、此處の會計のこと

を君に見て貰ふ。君にはその收支が分る。組合の誓書も書かう。大切なことは、根本的の異論が君にないことだ。何かあるかね？」

「先生一つもありません。今までも算へられませんが、先生の御深切な思召には感謝の辭がございません。」

先生は私を遮つて、

「この計畫については明日からまた話すことゝしよう。僕は彼方へ行つて、一通り見て來るから。多分君は僕より早く家内に遭ふだらうが、約束を覺えてゐてくれ、あの一語は言はないでね……」

「ですが。」

と、今度は私から、戸口へ歩みよつた先生を引留めて、

「先生絶對にその診斷は確かですか、私よりよく御承知ですが……」

先生は返答された。

「絶對確實だ。君は記憶してゐるだらう。六週間前に一人の患者からドイツに招かれた

ことがある。その機會を利用して僕は足を延ばして、伯林へ行き、變名でその筋の專門家に診て貰つた。この人も躊躇せずさう言つて、當然有名なケール式手術のオペラチオン・アン・パイオネットを忠告してくれた。」

と、古いドイツ發音の眞似さへしながら、先生は話された。

「それで？」

と質ねると、

「それでゐて僕はそれを欲しないのだ。根本的治療は不可能だからだ。それをして、手術刀の下で助かつたところで、四五箇月生き延びるだけだからね。それに早速死ぬといふ危險があるんだから、そんな危險は犯したくないさ。僕の勘定してゐるたつた一時間でも、自分から進んで失ひたくない程、僕は家内を愛してゐるんだ。ともかく、今は確實に一緒に時を過せるのだ。早く逝かねばならぬかも知れぬ危險を、何うして冒かせるものか。そんな山を賭けることができるものか。それに手術では動くことができなくなる。この憎むべき戰爭が原因で、折角機會をめぐまれた國への最後の奉公も、全然でき

なくなるのだ。僕は奉公をしたいのだ。最後まで役に立ちたい。ル・ガリックや其他の神話論者に對して、われらは神にもキリストにも用がなく、愛他事業をするのに來世も要らず、希望も有たずに出來るものだといふことを證明してやりたいのだ。いや、僕は手術を受けない。メスが持てる限り僕の方が手術をする。唯……」

彼は又もや前屈みになり、拳を胸の上で合せた。

「唯僕は時にあまり酷い苦しみをする。若しこの發作が五分も餘計に續くと……待つて呉れ……」

先生は小机の方に歩み寄つて、その抽出をあけ、其處から注射器を取出し、アルコール・ランプに火を點け、注射器の針を熱した先生は、職業的の落付きと方法とを恢復し、モルヒネの一服を注射器の中に注ぎこみ、腕を出して、針を突き立て、ピストンを押すのであつた。それは他人に注射をするのと同じ程の沈着さであつた。それから善くなつたので、運命的の注射をする器具を然るべき場所に納める爲に抽出の中に入れ、私にいふのであつた。

「もうこれも十センチグラムになる。これも他と同様不幸にも效力が弱つて行くのだ。これも家内の知らぬことだよ。ね、約束して呉れるね？」

「お約束申します。」

一〇

この善意の虚言の美德は、醫者を業とする者の初歩の「いろは」だ。すべて若い學生の我々は、始めての病院講義の時から仕込まれるのである。患者其人に對して容易に實行されることだ。患者の保存本能が共謀してそれを濫用させるものである。患者の周圍にゐる者、患者を愛する人達に對しては事が困難である。殊に患者の夫人の心配を止める必要のある時、さうである。母、妻、娘、姉妹などは、極めて自然に洩した言葉の中の缺語だの、よく開いたわれらの眼ざしの中の、奥底にある破片の意味を推測する敏感さがある。さういふ時は、もう直接には質ねないで、觀察し、探つてゐる。その狙つてゐる者とわれらとの間に一種の決鬪が起る。われらの素振り、言葉の調子、顏の皺、一つとして研究の種でないものはなく、その人達の不安で窺はうとしないものはなく、却て此方で外らさうとしてゐる意味の方に解釋しないものはない。この鬪ひは私も豫期し

てゐた。それは教授が去られてから三十分後に、夫人に會つた時から始まつた。最も巧みな者は、平靜を裝はないことだらうと私は考へた。そこで最初の質問の「先生に話して下すつて」に對して、かう答へるのが最も巧みであると信じた。

「えゝ、申しました。質ねました。先生も己むを得なかつたのです。診察をすることさへ許して下さいました。殊にお年なのですから、心配になることは確かに過勞のため申しましたが、やはりその通りでした。唯これといふ程の傷害のないことが何よりでした。」

「でもあの二三箇月前の黄疸の再發は？」

「つまらぬ黄疸は何等重大視することはありません。」

夫人は屹となつた。

「重大視しないでいゝんですか。」

この言葉で、夫人はその口よりも、疾くからそれを知つてゐたのだなといふことが解つた。夫人は畏をかけてゐたのであつた。

「では、何故デューラフォアが病理學の中で、膵臓の微候は常に留意すべしとか、尚附加へて、熱を伴ふ、或は衰弱の微候中に認められる黄疸はすべて疑ふべきものであると書いてゐるんですか？……私はこの數行を暗記してゐます。あの章は幾度も繰返して讀みましたから。私は主人の本棚からこの本や、まだ他の本を取つて見たのです。それにその頃から……」

「奥様！」

子供を叱る時の調子で、私は口を挿んだ。しかし、私はその教科書の中から、輕い黄疸は膵臓癌の徴候だと書いてある文句を見つけられたなと思つて戦慄(ぞつ)とした。

「奥様は醫者の令嬢で醫者の奥様です。父上なり、御主人なりが幾度もあなたのゐらつしやる前で、私どもの職業で、最も害になることの一つは、無知の者が醫書を讀むことだといふことをお聽きではありませんでしたか。こんな事を申上げるのは失禮ですが、こんな專門の事については、あなた方は無知の方です。繰返して申しますが、この種の一時的の消えやすい黄疸は、意味はありません。お願ひです。御主人の御安心のために

も、そんな教科書や、他の本をも最早あけて下さいますな。先生を危險だと信じましたら、私こそ一番に御養生を請求しますから。」

夫人の返答はなかつた。私は下手に虚言をいつたことが解つた。醫學の談をする空氣の中で育つて、普通の私どもの計略の裏を行くに相違ない婦人と、敢て危險のあり過ぎる會話をもはや引延ばさうとも、繰返さうとも私は思はなかつた。彼女自身も、その日から、私と話す時、依然彼女の胸を嚙んでゐた不安のことには、聊かでも觸れることは避けようとする樣子であつた。私はその事を、彼女が私どものしてゐる設備のことには氣が拔けて、器械的の擧動であつたので察しがついた。何かに祟りを受けた者によくある、夢遊病者の特質の、その全身の鋭い張りつめた氣持が、良人と同室になるや否や、すぐ生れるのでよく窺はれた。その外面の靜けさの下に、劇しく感じられる內心の苦悶には、唯一つの原因だけがあつたのだらうか、ガル・リックが訪ねて來た時の最初の嫌疑に戻らないまでも、彼女の焦慮の樣子が、日によつて大きくなり、殊に士官に對して、先生自身が希望された郵便はがきの着いた時、それが明かだつたのを、私は觀察せずに

はゐられなかつた。前線から來たその軍事郵便は、居所をすこしも記してなかつた。それは唯定まつた月並の無事を記したものだつた。オルテーグ夫人がそれを受取つた時、心が動かないではなかつたとしても、手紙が名宛人に着いた時に、或は死神に憑かれて冷めたくなつてゐるかも知れぬ手で書かれたのであつたら、近親の者、幼年時代青年時代の遊び友達だつたものが、既に緊張してゐる彼女の神經を一層動かしたつて、自然過ぎることであつた。私はそのことを判然辨へてゐた。その人並の單純な戰慄の中に、何等小說めいたことはなかつたのだ。それに何うしてこんな殘酷な現實の壓力の下に挾まれて、女の心がたゞの一分だけでも、想像的な感激に耽つてゐられるものだらうか。

私もこの鐵の壓力に、日に日に强く挾みつけられてゐた。これ程の酷い現實に、刻々痛められてゐた時、感傷的な込み入つたことを夢みる時間を、何處に見出せたらうか。八月のその幾週間が私に甦つて來ると、私は新たにその惱みを感ずるのだ。最初は野戰病院の物的の仕事の傍に、療養所將來の管理のことに私が通じるやうに、長い間オルテ

ーグ先生と差向ひのことがあつた。勿論私は決定的に先生の計畫に同意してゐた。私の精神は、私には始めての思想や記錄の運びに慣れる必要があつた。この一々の打合せは、偶然私をその中に加へたところの、病理的悲劇の感じを新たにするものだつた。オルテーグ先生を衰へさせた仕事を私は一層細かく、敎はつた。また同時に、何といふ富裕さから、間近に迫つた死が先生を奪ひ去らうとしてゐるかを知つた。先生はもはや私の前で苦痛について遠慮はなかつた。その都度、殆ど刻々に喰ひこんでゐる病氣から、またその劇痛を和げるために使つてゐられた藥劑が成す心身破壞の跡を見た。先生自身は、自分の苦しむ引切りなしの苦痛を、時には狂人にする程の苦業の針帶に比較された。私は黃疸が、先生の掌にも結膜にも、再び現はれ、顏を犯し、諸所にそれが濃くなつて來るのを認めた。その顏つきの西班牙型が、黑蒼味がかつたことによつて際立ち、それが一種の美しさ、しかし、凄い、不吉さを見せ、若い妻の次第に聰明さが增す目の前に、悉くそれがあらはれるのだつた。同時に、それと並行して、最初アルザスで成功の空な希望があつてからは、時局の苦惱は增大しつゝあつた。ナンシーでは佛軍が蹂躙され、

ベルギー軍はアントワープに追ひ詰められ、ナミュールは砲擊され、シアルロアで戰鬪が行はれ、リエージュは奪取され、ドノン及びザールの隘路は拋棄され、ロンヴィーは奪はれ、モーブージュも取られ、次に退却、獨軍はコンピエーニュ、サンリスに出現し、政府はボルドーに出發し、巴里は脅かされ、竟にジョッフルの動議となり、危險の重大さは「是非とも征服地を守り、死すとも其地を動かぬこと」といふその言葉が示してゐた。さうして、待機、莫大な希望、われらはそれを信ずることを敢てしなかつた。それからウールク、グラン、モラン、モンミライユ、敵は擊退され、リュネヴィル、サン・チエー、ラン、ポンタムソンは救はれ、最後にマルヌの大勝であつた。瀕死のオルテーグ先生の傍で、丁度その日頃、始めて負傷兵が到着したのと打突かつたけれども、私の心は喜びに滿ち溢れた。

それは九月八日の火曜日に、軍部から負傷兵を屆けて來たのだつた。どれも頭なり、脊柱に疵を受けてゐた。オルテーグ先生の專門がヴァル・ド・グラース病院でかやうに選ばせたのだつた。負傷兵の來たことは、その使用に當てゝあつた鈴の音で知らされた。

私はその鋭く長く尾を引く最初の呼び聲を久しく聞く筈であつた。オルテーグ先生と私は、電話で既に知らされてゐたのに拘らず、飛び上つた。直ちに病院の全員、看護人も看護婦も、オルテーグ夫人も一緒に下へ出た。三臺の自動車が入口の前で止まつてゐた。三臺とも赤十字のついた長い鼠色の車で、幌をかぶせてあつた。その後私どもは幾臺も同じやうな車が、氣の毒な重荷を積んで、この狹いサン・ギョーム街に止まるのを見た。だが、常に同じ胸騒ぎで、この最初の到着の記憶を想ひ出すのであつた。我々は八月初旬の、フランスの青年のすべて、つまりフランスの全兵力が、唇に笑ひと怒りとを浮べて出て行つたその日から、まだ極く近い日數の經たないことであつた。我々は東(レスト)と北(ノール)の大停車場で、火山のやうに、また一同が人間の熔岩のやうに、われらの最も暑い、最も善い血液が國境目ざして進んで行くのを見た。我々は花の咲いた汽車が動揺し、南部から北部へかけて、汽罐車の煙と一緒に野原を飛び廻つてゐる歌を聽いた。これらを見たことは、私にとつては甚だ酷いことで、銃後に殘つてゐることを迚も口惜しく、療養所の仕事の合間に急いで食事をした程だつた。私は又も婦人の目が恐怖で大きく開かれ、

未知のことを、男のそれ以上に、豫め深く察するやうな氣がした。季節は變つてゐなかつた。夏の太陽は透き徹つた空に、相變らず燃えてゐた。さうして、錯覺を起した眼に見えるものが、血の滴る、即時の、和げられない現實になつてゐた。私の前に、二人の看護人が徐々た車の中から擔架を引出してゐた。それには强直した形のものが、藍色の外套に、赤いズボンで、頭は繃帶に包まれ、土色をした顏の下部、乾き切つた齒の上に引緊まつた唇の、蒼味がかつた口しか見せてゐなかつた。次に今一つの擔架、次にまた一つの擔架と、玄關先の下に並べたのが七つあつた。オルテーグ先生と私は、學生達の助けを得て、これらの人を一應診察した。應急の手術が必要なものもあつた。その人達が沈默してゐるので、私は驚いた。彼等はシアルロアから、そんな傷口に觸れもしない小野戰病院に二箇所停まつて、動物車に轉がつた儘、非常に苦しんだものと見えた。非常に苦しんだのだから、彼等は口を利かうとしなかつたのだつた。孔が穿いて、藁をかぶつたその服から、汗と血の臭ひが上つてゐた。彼等は足に重さうな編上げをつけた儘で、それには戰場の土が附いてゐた。私達が痛ましくも、その中の二人が盲になつてゐ

るのを認めた。第三の者は實際に負傷から失語症になつて、一語をも發することができなかつた。その他は目も見え、口も利いたが、甲の者は腕が一本痺びれてをり、乙の者は足が一本痲痺してゐた。半分昏睡に陷つて、時々、一度聞いたら忘れられない鋭い腦膜炎性の叫びを出す者も一人あつた。

「あの若いル・ガリックの信じる神の覺召で、これは完全な見本だ。直ぐさましなければならぬのは、實にこの患者だ。上の室に運んでくれ。」

と、オルテーグ教授は、最も重い、腦膜炎の人を指して言つた。

一一

私はオルテーグ先生の手術を毎度見たことがあつた。競爭者の驚く前で、先生の好んで行つた外科の藝當に、私は助手として參加した。

「あれは手術ではない。あれは賭博だ。」

と、リオンのボンセー氏が言つたことがある。しかし、人の善ささうな笑ひを浮べて附足して、

「でも、先生が何れにも勝つよ！」

と言つた。

半分魔法のやうなこの凄い腕前の極祕は、解剖の並外れた學問に合せて、眼光の正確なことゝ、それに劣らぬ異常な指先の器用さにあつた。私ども手術に親しい者も、この當初の負傷者と、直ぐその後に來た多すぎる程の患者に對し、先生以上に輝かしい、大

膽な、幸福なメスの達人さを示した者はなかつた。この最初の來着者から一週間で、四十の寢臺は塞がつた。傷害の例も先生の腕前から癒る者が、多くなればなるに伴れて、この外科醫先生は益々「親分」といふ氣分に活氣づいて來た。その科學的若々しさの熱が、死を言渡された者に甦つて來た。眞實を知つてゐた私は、この專門職業の熱意が再生したこと、しかも、先生が壞血病初期の容態にあつたことを忘れはしなかつた。モルヒネは癌に劣らぬ破壞の作用を始めてゐた。その健全さが、實は中毒の初期を印してゐたのであつた。一番胸苦しいことはオルテーグ夫人の不安に弛みの來たことだつた。彼女は氣の毒な良人が、その身に施しつゝあつた悪い癖を知らなかつたのだ。彼女は先生が素晴しい外科の場合に、普通の熱意を見せ、それを語つたり、討議されるのを眺めてゐた。夫人は衰弱をもつて神經衰弱以外のものでないならば、直らぬこともないと、屹度結論を下してゐられたことだらう。況して先生の一切の能力、例へば愛他心までも昂奮してゐたのだつたからである。先生は常に不幸な人達に獻身の奉仕を惜みなく與へてゐられた。モロー・ジァンヴィルに向つて、外科手術のために五萬フランを要求された

時、先生は、「金持は貧乏人に金を出してやりなさい」と言はれた。この言葉は先生の場合には、嚴密に眞實のものであつた。その無料診察と、無料手術は、勘定の中に入れてなかつた。だから、先生は八月末九月初旬の間に繰返して言はれたときも、性格上に論理的のものであつた。

「この戰爭中に自分を役立てることができなかつたら、自分は何うなつたか解らぬ。僕達軍人でない者は、兵士に對して、負債を迎も十分拂ふことはできない。あの人達はわれらの爲に死ぬのだ。これこそわれらの忘れてはならぬことだ。お前カトリーヌにも、マルサル君にも、僕オルテーグに於てもだ。昨日耳の背後から彈丸を拔き取つてあげた人が、涙ながら僕に感謝した。《だが、君、僕こそ君に感謝してゐるんだ。》と返答して、その人に此處に送られたのは好運だつたとは附足して言はなかつた。神經外科の醫事新聞の中で讀んだ囈言など怖しいことだ。この戰爭が終つたら、マルサル君、僕達どんな本が書けるだらうね？」

先生は自己診察をしてから後も、誠實であつた。私達の心が實際錯覺に跟いて行かな

かつたことは不思議だつた。さうして、一分の間も、私どもは奇蹟を信じてゐるやうに話をした。要するに、訓練のある科學者の口には珍らしい肯定の言葉、それも衰弱した病人の口から出るといふのは、疑ひもなくモルヒネの新しい效力に相違なかつた。二週間を過ぎると、既に幸福な時期の後に續いて破壞期が來た。オルテーグ先生がその服用の分量を增されたせいか、病氣の中毒作用が、藥劑のそれと合したせいか、先生の精神人格に酷い變化の生じたことを認めて、私は驚いたのだつた。眞理を少しも違へぬこと、それに喧しかつたことで知られてゐた先生が、佯りを、しかも明かに病理的と見える虛言を言ひ出されたのを見た。例へば、事務室にゐても、庭を散歩して來たとか、またその反對のことを言はれることがあつた。讀みもしない新聞を讀んだと言はれたこともあつた。何でもないこの誇張症に、既に眞の意志痲痺といふモルヒネから來る不安症狀が合はさつた。今度は午前に仕事着を着換へ、エプロンを掛けた後に、長椅子の上に横になつて、

「マルサル君、回診して報告してくれ給へ……」

さうして、先生は疲勞のことを言譯けもされなかつた。十日や十二日前は、あれ程絶えず活動的であつた先生が、急速手術を要する患者の前で、怠惰な外科醫の『手術は明日』といふ延期の言葉を口にされた。この廢頽症狀を認めたのは私ばかりでなかつた。慰安の短期間があつた後に、オルテーグ夫人が前よりも驚きの增した不安の目つきで見てゐられた。彼女は敬服し、愛してゐた傑れた人柄を、もはや認めなくなつてゐたのだ。さうして、私もさうだつた。人違ひがしたやうだつた昔は惜氣なく流れ出て、盡きることのなかつた精力の源泉が、一時間毎に涸れる、その二重の影響を知つてゐるので、私は、ある變事の來ることを惧れてゐた。それは意外の形を取るだらうことを餘り推測しないまでも、この悲劇の第二幕として記さなげればならぬ全く職業的種類の事件が來るのを案じてゐた。

一二

この事件が正確に九月二十八日に起つた。その日時を記憶してゐるのには理由があつた。前の日にドイツの一飛行機が、巴里に四箇の爆彈を落して、十三になる小娘を一人倒したからだつた。

「何としても偶然は馬鹿だ！」

と、オルテーグ教授はその日曜日の朝、この變事の報を載せた新聞を私に見せて言はれたのだつた。

「何故トロカデロ通りへ行かなかつたかね？　その子の所へ。」

「では、デュフールを誰が手術しますか？」

と、私は返辭をした。

そのデュフールといふのは、前週伴れて來た砲兵大尉で脊髓の邊に砲彈で怖しく負傷

し、もう歩くこともできなかつた。詳細に診察して、オルテーグ先生は、壓迫からの痲痺で彈丸を拔き取れば直るだらうといふ結論に達してゐたのであつた。

「マルサル君、君の言ふ通りだ。誰が手術するかね？　いや、僕はこの氣の毒な人を忘れてはゐない。彼を救ふ試みをすることも今朝と定めたこともだ。早ければ早いだけ善い。あんまり遲れたね。今あの腐蝕では、それこそ時間の問題だ。室へ運んで置くことを命じてくれ給へ。」

さうして、私が命じて歸つて來ると、

「彼のお蔭で、僕は三日もモルヒネを用ひてゐない。また苦しい、酷くだ！　だが、それよりも惡いことがある。此處が痛いのだ。」

と言つて、頭を指し、

「頭の働きが遁げ失せようとするんだ。僕の、この厚みの中が固定するのだ……。デュフールに手術をする必要のあることを正面に見ると、僕は恐ろしいのだ。僕はもはや僕でない。こんな場合に、オルテーグとしては働けないよ。脫走するんだね……。ところ

で、僕はこの注射をしない誓をして、きつぱり中止してゐるんだ。僕は君の知つてる通り、姑息なことをする人間ではない。分量を減らして行けないことは知つてゐる。唯僕は急に禁欲したことから、お定まりの症狀があるんだ。不眠、蟻痒、寒氣、非常なヒペレステジアがあるんだ。しかし、その苦しい重みより困るのは、全く意志の上に來る鉛のやうな覆物だ……。マルサル君、デュフール君を歩かせたいね、歩くよ……、さあ、もう準備はできたらう……。」

數分後に、私共は手術室に入つた。先生は隨分神經的で、非常に緊張してゐられた。勇敢で不幸な目に遭つたデュフールに先生の大膽な企てが首尾よく完了することを心から祈つてゐた。手術の時間が迫るにつれて、昂奮がオルテーグ先生に增して行くのを、私は不安をもつて認めた。以前はその反對であつた。エプロンを掛け、ゴムの手袋をはめるだけで、先生は落ちつくのだつた。この朝は、先生は廊下中を恐しい饒舌で話し、語られた。私はその中で二つだけ明瞭に覺えてゐる。一つは、殆ど室の閾の所で、私を引止め、階段を下つて庭の中に出た教誨師の姿を指して、

「クールモンさんも多分モルヒネを可哀相なデュフールに頒けたところなんだね。これは他のものより一層疲れさすんだがね。」

それと、第二の話すべきことは、室其物が舞臺であつた。聽衆は看護人、看護婦で、臺上に睡らせた負傷者を取卷いた者どもであつた。

「君だちはこれから奇蹟を見るんだ。それも眞實科學的の奇蹟を見るんだ。この足なへの人が歩くのだ。この人の脊髓を解剖して彈丸を拔き取る。あゝ實に素晴しい手術だ。若い人達、君等は運が良い。二箇月に三度も脊椎切開を見るのだ。マルサル君に訊ねて御覽。あの人だつて助手をしてゐながら、それ以上度々は見てゐないのだ。」

輕快な調子で、先生はユーモリストの外科醫を目指して「人殺しの本能を滿足させて罪を受けぬ者」といふ人の惡い警句を無理もないものとするかも知れぬやうに、最も血腥い手術を豫告してゐた。惡趣味のその輕快さは、殆ど先生に似つかぬもので、腹匂ひになつて寢て休んでゐる患者の脊に沃度を塗る私を、熟と眺めてゐた。私もまた、何時もはしつかりしてゐる先生の指が、慄へてをるのを見守つてゐた。この間に彈丸の見え

るラヂオ板に導かれ、三叉コンパスを持つて、今は全く黄色くなつてゐる皮膚――しかし、先生の顔以上ではなかつた――に三つの標點を記した。その準備が濟んでから、先生は、骨まで通ずる深い眞直切開をして、椎骨露出の方法に取りかゝつたのであつた。先生のメスは平素の的確性がないやうに思はれた。私はその徴候について、反省する暇はなかつた。その露出は常のやうに、夥しい血の流出を伴ひ、手術の場所を暗くする虞れがあつた。私は傷口の塞がらぬやう支へる開張器を二つ握つて、一つを利用し、一つをオルテーグ教授に差出してゐた。驚いたことには、先生は私の姿勢に對して頓着がなささうであつた。先生は血潮の中で、引續いて仕事をしてゐられたが、それはためらつた、不確實な手つきであつた。突然、先生はメスの柄を放して、氣が遠くなつたものか、眼が釣つて、様子が變になつた。私どもが椅子の上に迎へる暇があるか無いかくらゐに、その上に仆れかゝつて、嗄れた聲で呟かれた。

「僕は見えん！……できぬ……！」

さうして、、この怖しい虚脱の中で、一時閣くなつた能力の中の、唯一つの職業上の名

譽心から、先生はまだ私を押し、血塗れになつた患者の蠢いてゐる机を指して、かう言はれるだけの力はあつた。

「あれを、マルサル君！　遣つてくれ、彈丸を抜いてくれ……。」

一三

私は義務について疑念はなかつた。第一には手術を受けてゐる人のことを考へた。二人の看護人が、仆れた外科の先生を支へて運び去つてゐる間に、私は患者の出血を止めることを試みた。しかし、次は何か？　傷を縫合せるべきか。とにかく、怖しい言葉の「時間の問題だ」といふのが耳にあつた。知らぬながら手術を續けて、只管、オルテーグ先生によつて示された診斷に信頼して行くべきか？　私はこの第二の方の決心をした。それは先生の精神の缺蝕が一時あつたばかりで、その天才によつての示唆はあるものとしたからだつた。殊に衰弱の結果陷られてゐた悲歎の裡にあつて、尙受得られる唯一の慰安をしてあげたいといふ念に負けたのだつた。私どもが今度顏を合せる時の、先生の第一の言葉は、「デュフールは？」の質問であらう。若しそれに應へて、「彈丸を拔取りました。唯脊髓の壓迫でした。助かりました！」といふことができたら、どんなにか先

生の元氣も出ることだらう。こんな事を考へて、胸騷ぎのする中に、起ち上つてゐた痲醉係に對して、負傷者の口に今一度マスクを掛けることを私は命じた。患者はその呻き聲から、間もなく覺めることを豫告してゐた。さうして、開張器を十分當てさせて、殆どミリメートルの間違ひでも生命に關係する惧れのある場所の探索を始めた。私の醫者の生涯中、これ以上長時間と想へた仕事を行つたことは記憶にない。どの場合も、骨の切開破壞の重苦しい詳細の事件を通じて、この時以上に、時間の經つ感じを受けたことはなかつた。その感じについては、私たちの先生のジァン・ルイ・フォール先生が『外科醫の魂』に關する論文の、立派な頁中に十分述べてゐられることである。この先生は、手術者が昂奮し、高揚し、新しい力を與へてくれるところの戰慄が起つて來ることを知らせてゐる。筋から筋を辿り、血の流れる筋肉の中から、私は又してもオルテーグ先生の歸納の確實なこと、その洞察の眼力の程に敬服した。彈丸は正に先生の言葉通りの所にあつた。私はそれを捉へて引拔いた。髓の上を壓へた力は消え失せ、それと俱に痲痺が消えるのであつた。奇蹟は起る筈だつた。負傷者は救はれる筈であつた。斷つて置く

が、この患者は、立派に助かつて、先週豫後休暇を取るために退院した程だ。その助かつたことが、どんな大事件の中を過ぎて行はれたかについては、當人は一向氣づいたらしくもなかつた。ジァン・フォール先生は、このことを、痲醉を受けた者のことについて語つて、當人だけが手術臺の周圍で演じられる活劇に、無頓着な唯一人だとしてゐる。その事が、右の話の場合以上に、眞實だと想はれたことは無かつた。その時は仕合せな結果になるとは想ひもせず、助手達が、依然として睡つてゐる、しかし、生命を取戻した患者を、その間に他へ運び去つたのだつた。

私は、手や顏を一面に染めた血を洗ふ暇のあるか無いかの中に、汚れたエプロンの儘、オルテーグ先生の部屋の方へと急いだ。指の間には、寶物のやうに、先生に口を利くより前にでも渡したい、と念つた彈丸を握りしめてゐた。

途中で出會つた看護婦が言つた。

「先生は正氣にお成りです。御依賴ですからモルヒネの注射を一本して差上げました。

一人で居らしてくれと仰しやいました。今長椅子の上にお憩みになつて、奥樣が番をしてゐらつしやいます。」

私は想つた。

「先生は又お始めだな。これは運命だつたのだ。それの方が結構だ。手術最中に視力が混濁し、足のふらついたのは、モルヒネを突然中止されたことが原因なのだ。そのため死亡卒倒といふこともあるかも知れなかつたんだ。容態を知つて置かなければならぬが……睡つてゐらつしやるのかな？……兎も角、先生の隣の室に入らう。寢てゐらつしやれば引揚げよう。でなければ、手術の成功したことを聞かれることが一番良い藥だらうから……」

そこで、私はできるだけ靜かに最初の入口を開いた。さうして、爪先で歩きながら歩いたのだつた。もつと早く閾を越すことはできなかつた。それはこの部屋を控室としてゐる室から話聲が聞えたからだ。私は二度目の戸を叩き、私であることを告げようとした。が、判然聞える聲が私の足をとめさせた。それは非常な力で私に響いた。そして、

次のやうな怖しい對話を私は徐つとして、眞に電擊を受けたやうに聽いた。オルテーグ先生は、もはや悲歎のあまりわが祕密をかくす力を有つてゐられなかつた。先生は夫人にわが病名とその餘の事を話されたところだつた。その時夫人は叫ぶのであつた。

「だけど、あなたが死ねば、私生殘つてはゐられません。お死になつては可けません！……」

「可哀相に、あんたは生殘りなさい。それが正しいのだ。あんたはまだ三十でもない。生きてゐる權利がある……」

「あなたがゐらつしやらないのでは、」

「さう言つてくれるな。僕を誘惑してくれるな！……誘惑してくれるな！」

先生は繰返し言はれた。私は椅子の動いた音で、先生が今度は室內を歩いてゐられることを察した。

「さうだ、さう想つた。あんたを一緒に、暗い所に、寒い所に、空虛の所に、引張つて行かうといふ怖しい考を持つた。僕が死ぬと定つたのを知つてから、唯の一度ではない。

二十遍も、僕はあんたの寢息を窺ひに夜中起き上つた。僕はあんたの、穩かな、瑞々しい、規則正しい呼吸に耳を澄した。僕は蠟燭を點けて、あんたの目を覺さないやうに手で匿した。あんたは美しく若く見えた。あゝ、この若いといふ言葉は、何といふ言葉だ！　一年後に、二年後に、十五年後に、何時も美しく、さうして、その時僕は非常な隔りだらう！……私は想つた。僕はもう幽靈に過ぎないのだ。若いものは僕を忘れるのだ。」

「そんなことはありません。」

荒々しく彼女は叫んだ。

「さうだよ。」

先生は劣らず駁した。

「人は何でも忘れるものだ……。だから、絕望、嫉妬、怒りもさうだつた。で、僕は考へた。寢てる間にあんたを氣づかないやうに殺したら？　唯方法さへ選べばいゝのだ。劇しい毒は澤山ある。それは彼處にあるがね。その後から、僕は身慄ひした。僕はあん

たの寢臺の前に跪いて赦しを請うた。あんたは何んなに僕が愛してゐるかに氣がつかないのだ。僕が恐いとおもふのは死ではない。死ぬつてことは、それを知らぬ者、見たことのない者にだけ神祕のものだ。僕はそれが大きな夢だといふことを十分知つてゐる。唯、カトリーヌ、あんたと訣れて、其處に入ることはね！　他人に委して！……それにしても、何うして、すつかり、この卑劣、恥辱のことをあんたに言ふのか？……あんたを恐がらせる……」

「あなたこそ何んなに私が愛してゐるかをお氣づきないのです。」

と、夫人は答へた。

「そんな事はない。あんたはもう僕を愛することはできない。人は屍を愛することはできない。僕はさう成つてゐるのだ。僕が鏡を見て、この厭な顏、痩せた頰、蒼黑い色を見る時、人が最早僕を愛することのできるものでないことが十分解る。もう、できないことだ。駄目だ……。今朝までかう考へる權利があつた。——父が學者で、その娘だけに賢いものだ。まだ氣に入る點、僕の才能、科學を認めてくれることができるのだ。この病院で働いてをり、微服されてゐるのを見て、僕を誇りとしてをることができ、僕の姓名を名乘つてゐることを誇りとすることができるとね……——この考が僕を支へてくれ、僕を昂奮させてくれたのだ。そのお蔭で僕は此處まで乘超えて來たのだ。この最近幾週間かを。僕が死人に與へたやうに、その證據を僕に返してくれ。それを終つたのだ。駄目だ！……今朝失神してからは、僕はもう器具に指を觸れることも控へる。死の下手人となることば餘りにも怖しいことだ……。多分僕もその一人だ。若しマルサルが成功しなければ……で、あんた、科學、僕の腕前、皆去つたのだ。皆……。ね、愛したものが悉く往つて了ひ、過ぎ去り、無くなり、一緒にそれが去るのを見、感じることは、しかも、何とも言へぬ死の中に！……」

「でも、私は行きません、ミシエル！　あなたが私を有つてゐるのです。私を失ふことはありません。ようございますか、私はあなたを愛してゐます。愛してゐるのです。」

と、夫人は何とも言へぬ調子で叫んだ。

それに劣らず、オルテーグ先生も駁するのであつた。

「そんな言葉を言つてくれるな。それは餘りに辛い。しかし、それは不可能のことだからね！……あんたは僕を愛することはないのだ。僕を氣の毒だとおもふのだ。尤も僕は十分氣の毒がられるべきだが……」

「わたくしは愛してゐます、あなたに生命を全部かけてゐるのでございます。愛してゐます……。不可能だか、馬鹿だか存じません。さうでございます。わたくしに妻になつてくれと仰しやいましたでせう。そして、わたくしも御承諾いたしました。あの日と同じ烈しい優しさで、今も愛してゐますわ。あの日にわたくしの生命を全部差上げました。あなた、それだのにお感じにならぬのですか？　わたくし何一つ取戻したいものはございません。わたくしの愛してゐますことは解つた、感じる、と仰しやつて下さい。さう言つてね……」

「僕はそれを感じることはできん。もう不可能だよ……」

「苦しんでゐらつしやるから、お不仕合せだからでございませう？　では、何故わたくしが愛したか、何故生命全部をあなたにかけて投げ出したか、解つて下さらないのです

か？　重ねて申しますさうです。生命全部です。わたくし二度と愛をすることも、中止することもできないんですから。取り分け二度生活を繰返すことは私にはできませんから。そのことは私母にも決して赦さなかつたことでございます。あなたは私より年上でした。あなたが私より早くお老けになることも存じてゐました。またそれですから、一層あなたを愛した譯でございました。父は私を科學崇拜の裡に育てゝくれました。父はあなたについて、念つてゐたこと、學者としての價値のことを話してくれました。わたくしを引きつけたのは、あなたの生命、澤山の辛いことを通して眞理に身を獻げられた生命の詩、あの酷い仕事の中にある高尚い、慈愛のあるものでこそあつたのでございます。わたくし思つたのですわ。《この人が老いを見せ始めたら、いたはつて、場合によつては、看病人にならう。自分は何處までもお役に立ちませう》と、私は心に誓つたのでした。他の御婦人は母親になることを夢に見てゐるのでございます。わたくしだつてあなたによつて、母になつたかも知れません。それで仕合せだつたかも知れません。わたくしはさう成りませんでしただけです。それを口惜しくは思ひません。でも、一番それを思つ

て下さる必要のある時に、それを感じて頂けないのでしたら、わたくし何うなつたら宜しいのですか？　私も。何處から力を見出してくれと思つて下さるのですか。この最後の試煉の中で、あなたのお助けができないのでしたら、何もかもお仕舞ひです。だけど、私はあなたを支へてまゐります。お助けを致します……」

さう言つて、再び强く、

「あなた私を殺さうとお想ひになつたんですか？　答へて下さいな。」

「それは言つた通りだ。」

「まだ答へて下さい。御自身を殺さうとお思ひになつたのですか？」

「さう思つた。」

「宜しうございます。私ども一緒に死なうとお思ひになつたのですか？　では、私があなたを愛してゐるとお思ひになつたのですか？……」

暫く沈默があつた。

「それは本當か？」

先生は訊ねた。

「本當かと仰しやるのですか？　このわたくしを見て下さい。」

「あゝ！」

と、先生の聲があつた。さうして、私は先生の聲が變つてゐるのに氣づいて身慄ひした。さうして、絶望の調子の次に、昂奮と陶醉の調子が續いたのであつた。

「さうか、僕はあんたが愛してゐるとおもふ。あゝ！　ありがたう！　ありがたう！この何週間か前から、始めて惡夢から覺めたやうだ。呼吸をするのも、感じることも、やゝ樂だ。さうか、僕をあんたが愛してゐるのが今こそ感じられる。實にうれしい！心の中が穩だ！　氣が緩くりする！　さう言つてくれるのは、僕を愛してゐるからだね！」

夫人は涙聲であつた。

「やうやく！　宜かつたこと！　わたくし、熱烈に、絶對に、あなたを愛してゐるのです。ねえ、あなたのゐらつしやらない、世の中を棄てるのに骨は折れません。わたくしだつて死など怖かありません。大きな眠りが何んなものか、私にも解ります。何時私ど

もは入れることでせう？　あなたの可哀相な肉體をさう苦しませないやうにするのは今日でせうか？ 私達かう一緒になつて、互に透明な氣持でゐるこの瞬間の今直ぐですか？宜しい？　わたくし準備してをりますわ。」

先生は答へた。

「まだ！」

この怖しい瞬間、私の尊敬に慣れてゐた先生、この人から、馬鹿げたこの獣身の申出に對して、反對の叫び、拒絶の態度を、どんなに苦しさで待つてゐたことだらう。その叫びを先生は出されなかつたのだ。目に描かれないその態度を私は察した。その精神が肉體と同じく、病的になつてゐることの證據だつたのだらう。先生は議論することもなく、先生もこの愛に生命全部を賭けてゐられた證據の、精神錯亂の氣分の裡に、心中といふ怖しい計畫を承諾されたのだつた。さうして、續けて、「今、僕はあまりにも幸福だ。それを失ひたくない。僕があんたを見る目のある限り、あんたの手を握る手のある限り、あんたがゐるといふことを知る思ひのある限り、僕は一時間も、一秒の間も、あ

んたを失ひたくない。モルヒネはあまりの苦痛を救つてくれる。僕はそれが仕事の邪魔をすることを見たから恐かつたが、それはあんたを見、あんたの呼吸を聞き、あんたの生きてゐるのを感じることの邪魔にはならん。僕にはまだ何週間か、多分幾月かがある。僕はそれを失ひたくない。」

「私もさうです。だけど、一つ約束して下さい。私どもの愛に誓つて約束してね。あなた私を伴れないでは逝かぬといふことをね。それはあなたが私を貰ひたいと仰しやつたやうに、私どもの間の契約ですよ。覺えていらつしやる？……あなたは醫者でせう。最後の來る時の症狀をよく知つてゐらつしやるでせう。それが起つたら言つて下さいね。また私の採る方法もね。わたくし勇氣を出します。一緒に暗い、冷めたい、あなたの仰しやつた空虛の中に滑り込みませう。ね、あなたがゐないでは、もつと何だか暗い、冷めたい、空虛なものがあるでせう。ミシエル！　あなたは私が約束を違へたことのないのを知つてゐらつしやるわね。私も約束を守つたでせう？」

「あんたは約束を守る。」

「ありがたうございます！」

それから甘つたれた聲になつて、患者に向つて言ふかのやうに、

「あんた一寸お眠みなさいね、それが必要よ。今となつては私ども殘りの時間を大切にするのが務めですもの。横にお成りなさいね。お眠りなさいね。」

「手術の結果を知らない中にはできん。僕はあんなに酷く顚倒へつたのだつた！　氣の毒なデュフール君のことを忘れてゐた。マルサルが救つてくれてゐたら！……」

「尋ねてまゐりませう、直ぐ戻つてまゐります。」

一四

私は自分が廊下に出て、時を過す暇はあつたのだ。其處で偶然オルテーグ夫人に會ふことになるかも知れなかつた。夫人は手術室から私が歸つて來るのに會つたと想ふかも知れなかつたのだ。最初、私は實際その積もりで引揚げの動きかたであつた。それから、再び私は立停まつてゐたのだ。私は、この言葉を耳にした。

「今日……直ぐ……」

若しオルテーグ先生が新たな發作の極、力が盡きて、あの決心を練られるやうだとしたら？　今晩にも怖しい計畫が實行されるとしたら？　明日にでも？　この大惡のことに面して、私は咽喉にあつて叫びを早速出さなかつたことで、果してわが身を救せることだらうか。といふのは、今この病院の負傷者全部に、この苦痛の中にあつて、卑怯の例を示すのだつたら、それこそ惡いことの一つだからだ。私がかやうに躊躇つて一二秒

も經つか經たない中に、夫人は入口の戸を開いた。夫人は私のゐるのを見、ぞつとして後退をした。それから唇の上に手を當て、默つてゐろといふ樣子で、閉ぢた入口の方を片手で指し、私の腕を捉へて引張つて出た。

「あなたずつと、其處にいらしたの？」

夫人はわが控の部屋――患者に極く近い――に私を伴れて入つた時、かう訊ねたのであつた。さうして、これは一層この時の會話の悲痛さを增すものであつた。先生が一刻も早く可哀相なデュフール大尉の運命を知りたくなつて、出て出られるかも知れなかつたからだ。私は答へた。

「さうです、奧樣、私は手術を終つて、それが旨く成功したものですから、彈丸を先生に持つてまゐつたのです。」

虛言を言はうとしたつて、實際何になるものでもなかつた。

「では何故入らないでいらしたんですか。何故立聞きして窺つていらしたんですか？」威たけ高に夫人は訊かれた。私は遮つて、

「奧樣、私には言譯はできません。私は入るべきか、引揚ぐべきかだつたのです。本當に、私はこの場に釘付けされてゐました。」

「では、これから先生に、わたくしを死に伴れて行く權利はないと言つたり、わたくしがやつと差上ることのできた最後の喜びを善くないかのやうに話さうお積もりですか？でも、わたくしは厭です。マルサルさん、それは厭です……一寸默つて！」

夫人は再び指を口に當て、耳を澄ました。誰かが廊下を通りかゝつて、次第に遠ざかつて行つた。夫人は續けて、

「その彈丸を下さい。主人に持つて行きます。患者が助かつたと知つたら、癒むでせう。それまではいけません……。待つてゐて下さい。」

五分後に、夫人は引返して來た。私は考へる暇があつた。さうして、私こそ彼女を迎へてこんな言葉で話を再び始めたのである。

「奧樣、私は先生には申しません。先生は大病です。これ以上昂奮をおさせしません。何箇月か前から、先生は非常にお苦みだつたのです。奧樣も今御承知の通りです。全部

の表面を飾るためのこの手術が、惨ましいことには中斷されたのです！　私ども軍の病院にゐるのでなければ、私は此處から去つて仕舞ひます。しかし、それはできません。先生は私を行かしては下さいません。私のゐることは益々必要です。先生の弟子として、私は先生の指圖を行ふことに全く定められた言はゞ手でございます。若し先生の仰しやるやうに、手術を御中止になればです。ですから、私は去つて了ひません。そして、また先生にはお話しをいたしません。繰返してその事を誓ひます。ですが、先生に對して沈默を守りますその事が、尙更先生に對する信仰、また奥様に對する尊敬からして、奥様に向つてこの事だけを申しあげる權利がございます。奥様、この心中と申すことは罪惡でございます。それをお犯しになつてはいけません。また、それを他の者に犯させることをなすつてもいけません。」

「どんな罪惡です？　私の生命は私のものでありますか、ありませんか？」

「奥様だけのものではありません。人間の生命は自分だけのものではございません。それにしても、私が手術しました部屋に上つて、負傷者をごらん下さい。そして、良心に

伺つてごらんなさい。この世の中に誰か苦しみ惱んでゐるものゝある限り、そして、その人に多少とも善い事のできる限り、世を去るといふことは脫走することでございます。しかも、戰時に、普ねく不幸のある際には、苦しんでゐる者が何處にもゐるのです。」

「でも、主人が誰よりも私を要るのでしたら？　私には死んで良人を助けるより、他の方法がないのでしたら？　あなたは手術を受ける者のことを言はれるのですが、この際確實に傳染的不治の病のある患者を想像してごらんなさい。――その看護に看護婦が入用で、私は行きます――と來て言つたら、これも自殺でせう。それでも貴方は罪惡と言ひますか。マルサルさん、私はそれと變つたことをしてゐるのではありません。で、私の良心はすつかり平靜です。それに對して、貴方の良心が口を利いてゐるのではないでせう。それはあなたの偏見が言つてゐらつしやるのです。その事はずつと以前から認めてをります。貴方は眞實を考へることを控へてお出でです。わたくしは先づ父から、次に良人から、眞實のことを考へることを敎はりました。ね、自殺についてあの人の考を言はせて下さい。自殺についての良人の考を言はせて下さい。二年前のことで、その頃

あの人は病氣ではありませんでした。わたくしの女友達が一人自殺しました。その名前は言ひません。事件は偏見から常に隱くしてありました。ある人がその女のことに腹を立てました。私は今でも良人がそれに答へたのを耳に殘してゐます。――自殺反對の理屈は、生命を愛し、また各人が同じやうに生命を愛することを希望してゐるお腹の一杯な人が想像して作つたものです。その人達は、本能の中の最も動物的のものでもつて、美德を作り上げることを發明したから、ですつて！」

「ですが、その本能そのものが證明するとしたところで、自殺は自然に反してをり、秩序に反し、法律にも反するものでございます。」

夫人は妙に皮肉な調子で言ふのであつた。

「何處までもね、神さまから禁じられてゐるのだと仰しやるのですね。あなたがさうしてゐらつしやる間はね。わたくし、あなたを驚かしますよ。尤も意味からのことでございますがね。おゝ神があるのでしても、こんな辛い時に生きてゐなければならぬといふのですかね？　わたくしには、それが相當なのですかね？……それに善とか惡つて何の

意味があるんでせう？　わたくしは學者の娘で、學者の妻です。人生のことを考へるのに慣れてゐます。神はないものだといふことを知つてゐます。來世と申すものもないのです。善も惡も長い間の適者生存の遺傳の結果でございます。他の女の方にはそんな事は意味がないのでせうが、私には一つ意味がございます。父と主人とがよく說明してくれました。適者生存つてことが、もはや不可能になつた時、人間が多過ぎる程苦しんだ時、その苦しみから脫けることを何故お禁になるのですか。これは私のことですがね、私にだつてあまり辛いことですわ、マルサルさん。」

「で、若し兵隊が今日塹壕の中にゐて、あなたの尊敬なされる、愛してゐられ、例へばル・ガリツクさんのやうな方が、同じやうに――あんまり辛い――からつて自殺するとしたら、奧樣はそれを何うお想ひですか？」

「戰ひ得る者のことでしたら、それは本當に卑怯者です！　でも、戰ふこともできない者でしたら？……マルサルさん、私の良人を襲つて奪つて行かうとしてゐる、あの怖しい病氣と戰ふ術を與へて下さいな！　さうでしたらね！……いゝえ、何ともできないも

のだといふことを貴方は知り過ぎてゐらつしやるのですわ。癌はさうなのです。和げることもできず、治すこともできず、朝晩の廻つて來るやうに、その進むことは運命的のことです。良人の駄目なことは御承知でせう。今私はあの人に虚言を言つたのではありません。お聽きでしたでせう。あの人のために生命をかけたのでございます。あの人が亡くなれば、私は生き續けて行くことはできません。生活を繰返して行くことはできません。あなたは自然といふことを仰しやいましたね？　わたくし、生きてゐることの價値も、その美しさも、私には誠實といふことです。愛した後にも愛をしてゐる婦人、ある男に言つたことを繰返して他の男に言つたり、自分の過去を自分で否定するやうな婦人は、厭です。怖しいことです。私は變へたくありません。生殘ることの中で、一番怖しいことは、生きてゐながら心でもないことに變はることです。もはや一年も前から、主人が病氣になつてからです。あの人への私の感情が、尤も完全で唯一つのものでございますが、それでも遁げて了ひはせぬかと、時には恐いことがございました。ヴァンサンの許嫁のことを覺えてゐらつしやるでせう。頬を打たれて血だらけの盲になつた氣の

毒な人を繃帶する所へ飛び込んで、吃驚のあまり廊下へ逃げ出し、《もう、あの人ではない！　あの人ではない！》と叫んだでせう。あの絶望が丁度私のことです。ある時には、もう私は良人が解らぬことがあります。嘗ては私を感激させましたが、今では感激させて呉れないものが私の中にあることを想ひますと、私はぞつとします。でも、それはまだ愛でございます。それはあの人のために、またあの人からでないと、嘗て無かつた強い願ひでございます。あの人と一緒に死なうと申しますのは、それこそこの願ひを完成したいからでございます。本當に自分の生命を生きて來たからでございます。」

何と返事をしたら宜いのか。實際何によつて善くないと言へたであらうか？　彼女は全く眞劍で、絶對の誠實で、ある力の出て來て迫るものがあつた。一番内心の論理的の性質を捉へると、尤ものことだとなる。泣き叫び苦しんでゐる人を引離すので、怖しいものだと考へるのは、一時は道理あることのやうである。私達が彼女の生きてゐるのを感じてゐる限り、もはや判斷はできない。以前には、オルテーグ夫人の裡に、傑れた二人の影響のあることに氣づいてゐた。その人々の空氣の中で彼女は、最初は娘として、

後には妻として、育つたのであつた。しかし、その美しさ、上品なこと、表面の輕薄な贅澤さなどがあつて、複雜の中にも強く纏つた性格のその底まで知ることはできなかつたのだ。今こそどんな程度に、父の思想、良人の思想が彼女を導いてゐるかが解つたのであつた。その教へに、信仰同樣に彼女は執着してゐたのである。この馬鹿げた自殺の決心も、自分自身と堅く一緒になることのできる凝り固まつた人格の奥底から迸つて出たものであつた。昂奮と推理との混つた狂的憐憫の中で、考へ出された最高献身の意志が、窮局して全く一つの生命の集まりとなり、同時に強く、小説的に、また激しい體系を作つたものであつた。この強い狂熱に、學校のそれのやうな理屈で對抗することは、小石で堤を作つて、流れを止めようとするのと同じだつた。一層たぎつてそれを押流すだけであつた。單純な抽象的の思想では、理知と情熱とが一つになつて、全く緊張狀態になつた頭腦をせき止めることはできない。それは使徒のそれのやうな、劣らぬ緊張した頭腦が流れ込んで來るのでなければ抗し得るものではなかつた。生命だけが獨り生命に敵對ができるのだ。私の內心の弱さ、私自身の理知的な不確定なところが、どんな機

會にも、こんな狂亂の力の前では、私に兜をぬがせるだけのことであつた。それにこの事件には、また別の事情で私を麻痺させてゐることがあつた。夫婦には內密祕密のことがあるものだ。あんまり仲に入り込んでは冒瀆になるものだ。私はこの時それを感じた。さうして、心にもなくそれを聽いただけであつたのだつた。それは聽いてはならぬことだつたのだらうが、ともかくも聞くには聞いたのだつた。

しかし、彼女には言はなければならず、最も單純な人間らしい言葉しかなかつたのだから、私は言つた。

「奥樣は本當にお可哀相です。お氣の毒に存じます。」

「氣の毒なことはありません。」

彼女はオルテーグ教授を想はせる誇りをもつて答へた。先生が打明話をされた後に、握手をされた時の調子と、頭を振られた時のそれであつた。彼女は年齡の相違にも拘らず、この先生の妻であつた。尙また無益な感情へと轉じつゝあつた場面に、きつぱり打切りを與へた、決斷のある明快なことからも、さうであつた。彼女は夫婦の間で最後ま

で續けるつもりであつた悲壯な對座からの、新しい言ひつけを告げるためにしか、もはや口を利かなかつた。既にこんなに爆發したことが、彼女の意志以上だつたことに口惜しさうだつた。彼女は硬くなり、顏を顰めてゐるが見えた。さうして、干からびた調子で、きつぱり附加へて言つた。

「こんな事、皆無駄な時間費しです。私は主人の目の覺めるまでに、濟ませねばならぬ計算があります。あなたも手術を受けた者を監督しなければならぬでせう。往つていらつしやい。」

私は言はれる通りにした。しかし、入口を出るや否や、彼女の前に於てのマグネットの力が止むと、私は再びわれに歸つて、廊下を歩きながら胸の中で繰返した。

「こんな怖しいことは引止めよう。止めてあげよう。だが、何うしたらいゝのか知ら?」

一五

ある言葉を話してから後の沈默の印象は、實に變なものである。二時間後にオルテーグ夫人に出會した時、私は先程の對話に觸れることは不可能なことを感じた。彼女は氣を取直してゐた。彼女もそれに觸れることは許さなかつたことだらう。私どもは先生の前にゐた。先生も元氣が出てゐた。この數分間の睡眠で休息の取れた先生は、午前の手術のことについて詳しく知らうとして尋ねられた。

「マルサル君、君に滿足だよ。大きな興奮劑だつたよ。これからもう僕が手術をすることはあるまい。」

先生は私の抗辯しようとするのを手眞似で止めて、「僕は君と一緒にまだ奉仕をすることができるよ。外科醫になり給へとボージューで言つたのは間違つてゐなかつたねえ。科學に據つたこの術は立派なものだね！　手にメスを持ち、解剖の最も微妙なところが

解つて生命の作用の上に、文字通りに我々の働きを加へて行く時の理知の感激は、何とも言へないね！　今度の戰爭は、我々にとつて、異常な、又とない實驗の機會だよ。今日の用件を記憶して置きたまへ、殊に局部化の記號をね。君は覺えてゐるかね？」

先生が最初切斷の診斷を採用せられてゐたのに、それを脊髓壓迫の診斷に取代へられたことの、現患者の場合の動機を、啓蒙的の數語で要領を述べてゐられる間に、その面上に印されてゐる朗かさに、私は今更驚いたのであつた。先生の全人格の中の、ある種の伸びやかなところ、安心したところ、疲れの優しみとでも言つたものがあつた。何うしてこのメスを持つての先生が、こんな平靜さで瞞めをされたのであらうか？　この外科醫がこんなあきらめで讓歩されたといふのは、何の徵候であつたらう！　あはれみの道を迷つて持出された、あの二人での自殺計畫、絶望のとどのつまり承諾された、あの狂氣じみた契約が、奇蹟的にも、あの烈しい痙攣的な反抗心を鎭めたのだつたらう。死ぬ人が、すべてが崩れ、自分の中でも、周圍でも、何もかも沈んで行くのを感じて、腹を立て、突然生活に決別を告げる力を見出したのであつた。その生活には己の愛してゐ

る者を遺しては行かない筈のものだつたのだ。あゝ何たる熱情、何といふ精神の錯亂ともいふべきことだつたらう。この平和の樣子は、先刻の爭ひよりも一層私を驚かした。この男女の間の亂暴な死の契約は、では一つの遊戯だつたのか。一時の狂氣から出た氣まぐれであつたのか？　二人は考へつくや否や、絶對の、壓へることもできない全面的の誠實さで早速それを承諾したのだつた。そんな所から見ると、先生は非常に病氣で、それにモルヒネと熱情とで二重に醉つて、殆ど恍惚の狀態になり、夫人も魔術にかゝつたやうな眼つきであつて、いはば相互魅惑の現象の前に私はゐたのであつて、これでは誰が手を出しても、失敗より他には方法がなかつたのだつた。私の出會つたのは、その自殺意志が、同時に花を開いた時だつたのだ。二人は互に强制したのではなかつた。唯互に感傷的の傳染によつて氣持が通じたので、その時には運命だとも、宿命だとも想はれたのであつて、私は心の一番奥の奥までも、それで怖しい戰慄を感じたのだつた。

この宿命思想に、醫者は絶えず遭遇するものである。私どもの職業が教へるところでは、結果が卽時で、劇烈な時には、承諾をするし、期限が不定であるか、遠くて、時が

與へられてゐる時には、その思想を退けることがあるのだ。時局といふものは、私達にとつては、取りも直さず戰場だ。もつと善く言へば、同盟國だ。私達は幾度もそれが徐々に重々しい作用で、迚も直らぬものと見えるものを改善したり、事實の論理的の網の中で、最も確實な計算を顚覆(ひつくりかへ)すものであつて、意外な要素を入れて來るのを見ることがあるものだ。私には時間があつた。それは、偶然私を立合せた不吉な企てに對して、早速一切を試みなかつたことの言譯かも知れぬが、明日、明後日に行はれることではなく、またさう多くの日數を經た後のことでもないことが知れてゐたのだ。オルテーグ先生に、愛の熱病があることは保證された。先生は永久の訣別態度を最後まで延期するつもりだつたらう。多分その間に良心が自然と先生に目覺めて來るかも知れなかつた。殆ど間もなく語り合つた別の話によつて、そのことが明かになつた。先生の古い道德が難破した中でも、正直だけは殘されてゐた。先生はモルヒネ使用に再び墮ちたことを切りに私に勸辨してくれと言はれた。

「マルサル君、僕が注射をまた始めたので、感服できないとしてゐるだらうね？　それ

は違つてるよ。僕は約束を破つたんぢや無い。僕は自分自身に對して、手術をしたり、奉仕のできる者としてありたいので、苦痛に耐へる約束はした。だが、もうできないから、僕は約束を取消したよ。手術かね？　力が拔けたことの記憶が手術を禁じなければね……僕にはもうそんな力はあるまいよ……ね、この書物をやつと持ちあげるがね……」

それは前年出版した先生の『神經外科臨床論』といふ大著であつた。先生はそれを披いて、欄外の鉛筆でつけた註を指して、

「僕は若干細かい所を訂正するが、再版ができなければ、君、此處に訂正を挿んでくれたまへ。マルサル君、學者は決して十分細かい事に氣づかぬのでね。」

こんな心配は、先生に話をする實に好い端緒(とくち)であつた。しかし、何うしてもあの夫人との怖しい會話を耳にしたことが白狀できるものでなかつた。この數週間前から立腹が非常に劇しかつたので、その發作の危險があり、私との間を打壞しにする虞れがあつた。先生は主人だつたのだから、サン・ギヨーム街から私を逐ひ出されるとしたら、何とか

して邪魔をしたいつもりの、罪惡の犯人であるこの二人と私との接觸が不可能だから、我慢をする必要があつた。尙それに時間があつた。彼女と一緒に待つことになるその一番の力を、私はマルヌの戰爭にも一例として發見することができた。あの戰爭の進展は、あの九月の酷い月のあらゆる感情と混合してゐた。先生もその事を話し續けられた。

「何故ジョッフルが偉大か、君は知つてるか？　それは科學的戰爭をする所にあるんだ。」

先生は、獨軍の雪崩のやうに來る突進を數學的に測定し、有益な時間に豫備兵が到着しないことを計算し、豫備兵の方角へ前線を退却させた將軍を描き出して結論を下された。

「それこそ單純な常識で、觀察だ。現象觀察が教へるところに從つて、事實に思想を合せ、拋棄、變更、變化をするといふ、あのクロードベルナール先生の言葉で、それが實驗室の戰爭にも、同樣に眞理なのだ。人間精神に異つた方法が二つは無いものだ。唯一つのありの儘に現實を觀察し、それに調子を合せるといふことだけに價値があるんだ。

事實には事實をもつて働きかけるだけの事だよ。」

私はこんなに正しく確かり推理をして行く先生を見たのだ。さうして、同一人に多くの知慧が、多くの調子外れと結びついてゐることに驚いたのであつた。その日一日中、病院の仕事を通じて、私は先生のあれ程的確な掟に感服して、心の中で『事實には事實をもつて働きかけるだけの事だ』を繰返した。二つの繃帶をする間に、私は想像でもつて、一生自分に附き纏ふことになりかけてゐた問題にそれを當嵌めて見た。オルテーグ教授から定められた日よりも以前に、それを解決することはできなかつたものゝ、それは感じてゐた。私が掴んだ事實、あの怖しい心中といふ忌はしい意志を、何ういふ他の事實で妨げたものだらうか。唯心理的の事實によつてといふことだけは解つてゐたが材料はなかつた。この種の企てを前もつて防ぎ、この悲劇の第一根本的の要素であるオルテーグ教授の健康狀態を變へることができ、同じく二十五歳の時の無疵の體を取戻してあげることを强ひて考へることはできなかつた。と言つて、先生に說明をするといふそんな事には引下がるより他に術はなかつた。殘つてゐるのは、オルテーグ夫人の精神の

持ちかただつた。それは、彼女も變へることはできた。生活本能は　まだあの年では强烈である。最も人間としての名譽も强烈である。怖しく、また痛ましくもある。約束だけに、それに背きたくないといふこともある。私は解釋の中でその事をあまり認めすぎてゐた。彼女は恐れだの、退却だのと疑ぐられることだけでも、勘忍のできない種類の婦人である。悲劇的犧牲になるのだといふ誇りに、益々硬くすることがあるかも知れぬ處れがあるといふのに、何うして彼女にそれについて話しかけることができるものか。

その間にも日は日に次ぎ、週は週に續いた。九月二十八日の月曜日、次に十月十二日の月曜日が來た。若しオルテーグ家について、日々報告することにしたら、毎晩「狀態變化なし」といふ言葉を記さなければならなかつたらう。これは發表にあまり屢讀むので閉口させられるものだつた。それといふのは、戰爭が巴里から八十キロといふ非常に近い地で繼續して、しかも、まだ決してゐないからだつた。私は、この個人的の劇――尤も甚だ可愛い、他方に比べると實にはかないものだが――の中に入つてゐないかのや

うに、その變化を追究してゐた。私はそれを理會し過ぎる程了解し、またこの大合戰がエーヌ河地方でこの頃長引いて、氣の狂つた夫婦のするか知れぬ自殺に較べると、リスボンやメツシーナのそれのやうな地震と、二匹の蟻の死くらゐのものだといふことが能く解つてゐたが、國家的の不安も、今一つの私の中にある不安を麻痺させるには至つてゐなかつた。朝はもどかしげに新聞を開いて、アラス、ウェーヴル、上ムーズ邊に何處か前進してゐるかを知らうと思つて目を通した。さうして、讀み了りもせぬ中に、オルテーグ先生か夫人かの近づくのでそれを閉ぢ、唯二人の顏色を窺ふのみであつた。罪の計畫をした二人は何處へゐたのか。二度とあの事を語つたのか。勿論私は先生の顏からは、言はれるのを聞いた病氣の作用以外は、何も解らず、夫人の顏では、私の探索を免かれようとの決意の他には、何も解らなかつた。彼女は今では仕事に沒頭してゐた。その疲勞を知らぬ活動は、すべての人の驚きの種であつた。私は彼女が終日良人の事務室と病院の各室との間を絶えず往復して、些細の事件でも彼に報告し、良人が相變らず長椅子から與へる命令を傳達してゐた。先生は其處で長い間横になつた儘シガレツトを後

から後から燻ゆらしてゐた。眞面目な美しい顏の背後にかくしてゐた死の覺悟と、彼女の從事してゐた勤勉な慈善事業との間には、判斷に迷ふ對照(コントラスト)があつた。私はひそかに後悔の跡を見分けたいものと想つた。氣の毒な人々の爲になりたいといふ、殆ど熱病に罹つたやうな欲求は、時には豫めする贖罪のやうにも想はれた。

「自殺はこの際脫走だといふ、私の言葉の眞理を感じない筈はない。最初一度私はこの感情に問ひかけて見た。また始めよう。」

と繰返し想つた。私は常に、この明かな證據が、彼女の中で生長するだらうといふ考で待つてゐたのだ。折々かの女は、極めて簡單な言葉を發し、何んな深さに病院の悲痛事が陷つてゐるか、また如何に彼女が僅かな慰安の價値をも想つてゐるかを證明するつだつた。例へば同年輩の女友達の、極めて美しい、最流行の服をつけた一人が、晩餐に彼女を招びに來たことがあつた。その時私は彼女に言つた。

「戰爭のあるのに氣付いてゐない人を見ると、啞然としますね。」

夫人は答へた。

「本當ですよ。あの方は非常に好い方よ。ですが、負傷兵を見てゐないのです。若し私があの方のやうに市中に、晩餐を取りに行つたら、此處の人達が食堂に出て來て、私に恥をかゝせることゝ想ひますわ。あの人達が苦しんでゐる限り、私どもは以前のやうな生活はしてならぬ筈でせう。」

またある時、たしか午前であつた。夫人が私の新聞を讀み了つたところを見てゐたので、私はそれを差出した。

「御覽下さい。隨分旨く言つてある紙面がありますよ。」

と私は言つた。

「いゝえ、私には言つてあることや、書いたことは、興味がありません。この氣の毒な人達の苦痛より他には、何も實際(レエル)の事はないんですから。」

彼女は列柱の間を通つてゐた切斷手術を受けた人々を指していつた。

「それとあの人達にしてあげる助けとね、私は今のフランスに、戰爭をしてゐることゝ、さもなければ、看護をしてゐるより以外の事を考へてゐる人があるといふことは解りま

せんわ。」
と言つた。

この殊勝な信仰告白をして、私を感激させたその日の夕方、彼女の別箇の姿が、不吉な計畫は行はれないだらうといふ希望を全く私に取返へさせた。時は十月の半ばに近づいてゐた。戰爭はリールからヴェルダンにかけて猛烈であつた。でも、信じられない程の役所側の不統一から、負傷兵の來るのが半分中止されてゐた。丁度五時が鳴つた。午後の繃帶が何時もより早く濟んだ。廊下は訪問客の後の閑けさが行き亘つてゐた。その時は恢復期にある者も、秋の初寒に襲はれるのを避けようとして庭を引揚げてゐた。兵士達は命令を守るか、その中の誰も遲刻する者はないかを見るために、私は窓に凭つて見てゐた。唯一人オルテーグ夫人が人氣のなくなつた小道を散歩してゐるのが見えた。最初彼女だと氣がつくと、直ちに彼女の歩き振りが、平素は元氣よく、確かりしてゐるのに、疲れ切つたやうに、また倦きたやうに重々しいのに氣がついた。彼女は梢の黄色

く疎らになつた葉蔭を透して、綠の蒼白くなつた反映の、オレンヂに染めた、日沒の美しい空を眺めて歩を運んでゐた。微風も空氣を搖がしてゐなかつた。この綠の片隅の動かないのが、他にも及んで、この一圍ひを、妙に平和閑寂の小公園にしてゐた。われらの邸宅の近代的の正面は、それを超えて姿を見せてゐた。私は葉蔭のギザ〳〵の間から、色が褪めて中性になつて行く姿と、太陽が高い窓々のガラスを夕映に染めてゐるのとを見た。此處の、また時間の、常になく靜かなのは、疲れた足取りで歩いてゐる白い彼女の姿と調和してゐた。その憩んでゐる四圍の空氣は、若い婦人の惱んでゐる心を占めて行つたのか、さもなければ、周圍の物と彼女の想ひとの對照に惱んでゐたのか。芝生は、毎週先生が植ゑ變へさせる花壇で照り映えてゐた。これは療養所の優雅なものの一つで、戰爭があるにも拘らず、先生の例の自尊心の小さな誇りから、續けられたものだつた。オルテーグ夫人は、濃紫の花をつけた薔薇の前に立停つて、顏を寄せて、その一輪を摘み取つた。距離があるのと、黄昏が始まつてゐたので、顏つきは見分けられなかつたが、その態度姿勢、長く嬉しさうに嗅いでゐるその花、日沒の赤い空の前で、身を死に献げ

るのを耳にしたことがあり、生命に名殘りを惜み、わが身を惜みながら、訣別を告げてゐる傳說の若い捕はれた女のやうに、突然その前に現れた婦人によつてのそれは、何といふ象徵を見せつけられたことだらう！　われらの病院で、既に幾度か、冷めたい、不吉な苦痛の現實に打突かつて、彼女はあれ程優しい。狂氣じみたあはれみの激情の中で、申出た約束に對して心の中で、怖れから後退したのか。一時の超人的緊張感から迸つたその約束に對して、あまりに意志に强かつた心の中で、生れつきが反對を示して來たのか。私の空想してゐた無言の悲劇が、突然オルテーグ先生の出現されたことで完全になつた。夫人を探して階段を下りて行く先生を私は見た。先生は小道を二三歩進んだが、彼女は匂ひのする赤い花を相變らず顏に當てゝ不動の儘冥想を破ることもしないでゐた。先生は立停まつた。さうして、今度はたつた今夫人が薇薔を眺めてゐたのと同じやうに、彼女を見た。あたりは薄暗くなつた。太陽の反射は、もはやガラス戸に燃えてゐなかつた。オルテーグ先生の姿が現れたので、平和な時のお伽噺の世界も消えたやうだつた。この夫人の憂愁の姿に眺め入つて、先生は何を考へたのか。本當に墓の中に自分と一緒

に、彼女を引張つて行かうと相變らず考へてゐたのか。突然先生は夫人に近づいて、手を肩にかけた。彼女は吃驚したやうに振向いた。それから二人は靜かな足取りで、話もしないで、互に各の聲の響きを怖れてゐるかのやうに、家の方へと歸つて來るのが見えた。二人の沈默が氣の毒になつて、私は迎ひに下へ降りた。私は二人に石段の上で遇つた。私は內輪の問題について二人と話し始めた。それは夫人にとつては、その場を去る口實になるものだつた。

「わたくしあれを片附けてまゐります。」

と彼女は言つた。

夫人は行きがけに、列柱の間の卓の上に、美しい薔薇の花を置いた。椅子に凭つてゐたオルテーグ先生は、その花を手に取つて、手づから——先生は今では段々濃くなる色を隱くすために何時も手袋を嵌めてゐた——一瓣づつ花片をむしつた。先生の痩せた青銅色になつた顏は殘酷な表情を湛へ、火のやうな眼には憎惡の色があつて、その瞳膜のどす黑い色は見るのも怖しかつた。花びらが悉く床の上に散つて落ちた時、先生は卓の

上に、見事な薔薇から殘つたあはれな名殘りを投げ出して、

「これがマルサル君、現在の僕だ、花に復讐するんだね、僕ミシェル・オルテーグが！……」

先生は繰返して言つた。

「ミシェル・オルテーグだ！」

さう言つて、先生も夫人と同じ戸から姿を消された。私は返事をする一口の言葉をも發見することができなかつたのであつた。

一六

それから三十分後に、先生は私を自室に呼んだ。先生は手に一通の電報を持つてゐて、それを私に渡した。先生の古い弟子であつた前線の軍醫が、サン・ギョーム街の病院に、アルベール周圍の合戰にル・ガリツク中尉が、頭部を酷く負傷して引揚げて來ることを通じて來たものであつた。

「君、カトリーヌに用意させてくれ給へ。僕はもう何の力もない。これから寢るからね。」と言はれた。

彼の瞳の中には一種の麻痺が漂つてゐて、モルヒネの入つてゐる抽出が半分開いてゐた。先生が今注射を一本されたところだといふことが證明されてゐた。先生が睡らせたいものは、今度は肉體的の苦痛ではなかつた。直ぐ前の場面があまりにもそれを證明してゐた。近いことだが、同じ事務室で、あんなに攻擊的の、しかし、まだ全身にあつた

確かりしたところの多い言葉で、ル・ガリツクの訪問を受けた日から後に、先生は何といふ深い淵に墮ち、墜落してゐられたことであらう。廊下へ出た時、私はそれを想ひ出した。さうして、彼が聖者の名に代へた花の名について、冗談を言つたのを想ひ出した。また私は私の最初の疑ひ、それはオルテーグ夫人にかけたものだが、早速取消されたものや、從弟が彼女に吹き込んだ興味のことなどを憶ひ出した。私は意見を通した方が、何んなにか私の觀察が正しかつたか。さうして、結婚以來顏を赧めなければならぬやうな感情を一度も入れたことのない程、この女心は正直なものだつたと、私は信ずるところであつた。

「可哀相なエルネストだこと！」

と、電報を讀んだ時夫人は言つただけだつた。さうして、大粒の涙が頰の上を流れた。夫人は、もはやその涙を出させた正直な感情以外のものを隱さうとはつとめなかつた。彼女は續けて言つた。

「それは避けられなかつたんですね。一番善い者が射たれるんですから。善い人は勇敢

で、手本を見せるために危いところに出るんですわ。私の從弟は非常に勇敢だつたのですよ。子供であつた時からさうだつたのです。十歳の時、一緒にトレギエーで夏休みを過した時のことを想ひ出します。お寺が修繕されてゐて、屋根まで上れる足場ができてゐました。譯は知りませんが、町の子供が凧を取らうと思つて、上の梁の上に登つたのです。其處まで行つて、その子は怖くなつて、進みもできず、退きもできないで、梁に跨がつた儘で何うすることもできず、私達を見て救ひを呼んだのです。私達を伴れてゐた婆やが止めることもできない内に、エルネストは飛び上つて、板から板を傳つて梁の上に上り、子供に向つて叫びました。――ねえ、君危くはないよ――と言つて、その子の手を握つてその子を伴れて凧を拾ひ、少しも蹲むことはなかつたですよ。

『カトリーヌ、あんたには解らないが、怖くても進んで行くのは面白いものよ。』

と言つたその聲が今でも聞えるやうですわ。危險が好きだつたんですわね。マルサルさん、私の心配するのは、そんな傷を頭にして、もう前後が分らなくなつてゐやしないかといふことです。自分で自分の解らなくなつた人は、何んなに悲しいことでせうね！」

「でも、何故そんなに御心配なさるのですか。」
と私は質ねた。
「だつて、此處へ送られて來るんですから。」と震へながら彼女は答へた。
「その他の事は何でも病院では慣れてゐますわ。昨夜寢室で目を覺ましてゐて、その事を考へてゐました。この夜番の間には、非常に心を痛める一刻が、必ず何時でもありますわ。朝の黎明の蒼い光が入つて來る時です。夜通し激しい寢呼吸や、譯の分ら溜ぬ息や、呟きや、苦痛の聲が聞えます。その時苦痛は現れますが、また苦痛が鎭まり眠る時ですわ。さうして、休んでゐるこの苦痛をもつてゐる體の人々の前で、希望に襲はれることもあります。その眠りは、つまり、もう幾分か小康なのです。私どもは寢臺を一つ宛見て廻ります。その傷は解つてゐます。――二月なり、三月、五月の後には癒るのだ――と思ひます。それからある一人に目が止まります。その人の體は癒つても、正しい、破れた、記憶も、言葉もない生活が續くだけです。そんなのには、夢が覺めてくれなければいゝとさへ思ひます。可哀相なエルネストがそんな有樣でしたらね！」

「奥樣、前から最惡の場合を豫想するものではありません。善くないことです。」
と、私は宥めた。
「仰しやる通りだわ。でも私にはできないことです。」
彼女の目は一層暗くなつた。その謎のやうな言葉も私には意味がはつきりしてゐた。
やがて氣を取直して、
「彼を置く部屋の仕度をしなければなりませんね。今朝から空いたものにしませう。右の一號、第二の廊下のね。鈴蘭の部屋といふのですね。こんな所を花の名前では、今日ではあまり不吉でしたわね。」

事實、春の瑞々しい、輕快な、谷間の姫百合リリウム・コンヴァリウム鈴蘭を聯想して起す春の思想と、翌日私達の許へ衞生隊の送り屆けて來た人物の見かけとの間には普通でない對照（コントラスト）があつた。ル・ガリツクは歩くことはできたが、最初手當をされた時、少しの動搖をさせても明かに惡いと心配した外科醫のいつた通りに、釣臺に載せて運んで

來たのだつた。幾枚もの繃帶がその頭を包んでゐた。繃帶は頤繃帶まで續けてあつた。かやうに隈取られると、力强さうなその顏が、蒼く、頰は痩せ、眼は大きくなり、言はゞ、さも野の獲物のやうな哀愁が滿ちてゐた。二箇月の戰爭は、熱意のあつた中尉の上に痕を見せて、八月初旬に出發した時の、まだ元氣の害はれてゐなかつたのとは變つてゐた。負傷によつてと同時に、あまりの過勞と、また多すぎる程心を使つたためであらう。衰へて歸つて來たのであつた。しかし、オルテーグ夫人の現したやうな懸念は、あらはれてゐなかつた。それは痛く傷ついた肉體でありながら、精神に故障はなく、同じやうな元氣で、等しくまだ希望もあつた。彼はそれを最初の言葉で證明してゐた。部屋に漸く落ちつくや否や、さうした從姉の瞼に、涙のあるのを見て、

「カトリーヌさん、泣いてはいけません。僕はそんなぢやないんです。唯一つしか悲しいことはないんです。それは獨軍の勝利ですが、今日はその獨軍も負けたんです。僕は唯正しい戰爭の爲に敵と直面することより他に神樣に何もお願ひしなかつたのです。」

さう言つて微笑を湛へ、

「それが叶へられ、その上に、その事を知る恩惠さへ下すつたのですから、御好意が過ぎてゐるくらゐです。」

傷者の昂奮を見守つてゐたオルテーグ先生は言つた。

「さあ、エルネストや、さう話しちやいかん。僕の知りたいことは、その痛みのことだ。マルサル君、その繃帶を除つてくれ給へ。それから君、エルネスト、短い言葉で疲れないやうに返辭をして呉れ。まづ第一に負傷してから何日になる？」

「六日。」

「何處が痛いかね？　此處？……此處？……此處……？」

先生は手を當てゝ彼自身の襟首に觸はつた。ル・ガリックは、後頭部の神經のある所を指すやうにして、教授の手を止めた。

「さう、其處。」

「甚く痛いかね？」

「はあ。」

「それは內側の神經だ。潰れたのか、千切れたのか……で、眩暈はしないか？」
「今はありません。」
「熱は？」
脇の下に入れる體溫計は渡してあつた。
「少しもない。痙攣はなかつたかね？」
「ありません。」
「宜しい。知能完全……。僕の指が見えるか？」
先生は兩手を少し距てて、傷者の顳顬の兩脇に置いた。彼は答へた。
「よくは見えません。」
私は繃帶を擴げ終つた。後頭部に、其處だけ髮を剃つてあるので、よく小さな孔が見えた。オルテーグ先生は、長い間その傷を見てゐた。そして、漸く言つた。
「君の診斷はついたやうだ。後頭骨傷害。深部突入の疵。彈丸殘留。それは直後頭骨內にあるべく、眩暈、熱、痙攣もないから、手を加へるまでもない。傷の外見によると、

挫かれた骨片はない。注意してトレパンで檢査する必要がある。君は癒るだらう。彈丸は十分見遁すことのできる物となるだらう。寢臺で休息し、不良神經痛を鎭めるために、モルヒネ注射をし、彈丸の在所を移動させないように動かないことだ。君は極若いのだ。突破することができやう。まだ輝かしい日があるよ。ねえ、君。」
「この數週間塹壕で暮した日以上のものはありますまい。其處へゐて、砲火の下にあることと、刻一刻神と鼻をつき合せてゐるとさへ思ふこととは、實に素晴らしことですからね。」
オルテーグ先生は態とらしい愉快な調子の返答であつた。
「また今度にしようね。僕達醫者の職は、さういふやうに鼻を突合せることを中止さすことだからね。マルサル君、繃帶をし直して呉れたまへ。僕は少し休息して來る。エルネスト君、僕は君に會つてから隨分病氣してね。今もさうだ。だが、誰にも委さないつもりだよ。あの人にも君を診察することをね……
（先生は私を指した。）

明日は巴里第一のその道の名人ロージェルにレントゲンを撮つて貰ふよ。それが僕の診察を確證しなかつたら驚くがね。」

先生は夫人と私だけを後に、傷者の傍に殘して出て行つた。傷者は半分目を閉ぢ、頭を半分繃帶し、枕の上にじつとしてゐた。

すると、從姉の夫人は話を始めた。

「ねゝ、あんたはそんなに重大ではないのよ。教授は大抵間違はなくてよ。で、あの人が加はらない時は……」

傷者が默つてゐるのに對して、夫人は力をこめて言つた。

「あの人の言つたことを信じてくれるわね？」

たうとう彼は返事をした。

「分ることは解ります。前線の野戰病院で、丁度同じ場所を射たれた同僚の一人を見たのです。僕同樣に熱もなし、痙攣も起らず、思想の亂れもなかつた。それでゐて突然死んだ。これは僕のことだが、僕は覺悟はできてゐる。鄕里の船乘りのいふやうにね。覺

えてお出でか知ら？　僕のことについては言ひますまい。」

「でも、話したいことね。マルサルさん、同じやうな傷は二つとないでせう。馬鹿なことを言はないで、それよりか何うしてその傷を受けたのです？　少し打明けて下さらない。覺えてゐるでせう？」

「少しも勇しいことはなかつたのです。面白いこともね。戰爭はそんなものです。十遍も二十遍も戰鬪をしたが、彈丸が狙つてくれないんです。僕のしたやうに、それから交通濠に入つた。命令を傳達しに。休憩の時だつた。平凡な靜かな日でした。丁度脫帽してゐた時、砲彈がやつて來て、僕のやうにやられたんです。勤務中でなかつたり、殊に多くの兵隊が同一條件でやられて、泣言一つも溢さないのを見てゐなかつたら、愚劣にもといふところだつたが。で、僕は不平はいはなかつた。戰爭の初めから、僕も、同僚も、唯一つ、部下に對してあまり恥づかしくないやうにといふ考しかなかつたのです。兵隊は見事なものです。」

「あんたも屹度さうよ。」

夫人は口を挿んだ。

「僕も義務が果せてゐればいゝが……。それよりも御主人は何うなの？　たつた今病氣だと言はれたが……。」

私は先手を打つて、

「快い方です。さう祈つてゐますが……。」

「私達何も祈ることはなくつてよ。從弟に虚言を言つたとて何になるものですか、マルサルさん。エルネストは主人の様子を見拔き過ぎてゐるくらゐでせう。何處が惡くて苦しんでゐるか尋ねるでせう。さうでしたら、御承知のやうに、無駄に苛々させるだけよ。エルネスト、さうよ。可哀相なミシェルは、酷く病氣なのよ。生きる日數も定つてゐるのよ。一口で盡きるけど、癌なの。」

負傷した彼は、オルテーグ先生が去つてから、始めて從姉の顏を見詰めた。非常に氣の毒だといふ表情が、彼の面に、こだはりもない苦痛の表情と代つた。彼は獨言のやうに呟いた。

「あんた達は何時も十字架を見るのだ……。」

それから聞き訊して、

「癌か？　疑ひないのか？」

「疑はないのよ。」

「當人御存知か？」

「御存知よ。」

ル・ガリツクは躊躇ふやうに見えた。さうして、重々しく

「一つ質ねさせてくれ。兄さんの宗教的思想の立場からは、何んな處にゐられるのかね？」

「何處にゐればいゝの？　知つてゐるでせう。そんな問題は、あの人には嘗てないことよ。」

「死に直面してもか？」

「死に向つてもよ。」

と夫人は答へた。ル・ガリツクはまた躊躇して、今度は心配さうに、
「でも、カトリーヌ、あんた自身は？　僕達子供だつた時、あんたは信仰があつた。十歳以上ではなかつた。パークの休みの時、僕と並んでトレギェーの古いお寺の中で、あんたは殆ど若い娘だつたが、一緒に聖體を戴いたのを想ひ出す。彼處はあんたと僕との親類の人達が、幾世紀もの間、聖體拜領をした所だ。その人達の信じた、あんたも信じたその約束事が、良人と別れるといふ前日になつても戻つて來ないかね？」
「どんな約束？」
「永久の生の約束だよ。」
「永久の生はないわ。」
「僕はイープルで死んだ軍僧が、塹壕の中で僕達に繰返し言つた聖パウロの言葉で答へよう。唯この世にのみ希望持たば、われら人の中にいとも不幸なる者なりだ。」
「私達不幸か何うか問題ではないわ。それよりか、眞理の中にあるか何うかが問題だわ。」

「眞理といふものは、それで苦しむとか死ぬといふことはできないもので、思想の中にあるつてことはできないものだ。」
「エルネスト、わたしなり、わたしの良人を見て頂戴！」
と、夫人は妙に挑戰的の調子で言つた。
「わたくし達に苦しむことはないか、死ぬことはできないか、いづれ解るわ。」
さう言つて、
「先生はあまり話さないやうにと望んだのに、あんたに話させたわね。看護婦を呼んで來ませう。マルサルさん、心得を敎へてね。」と附け足していひながら、今度は夫人が室を出た。そして、一寸微笑して、自分の出て行く失禮を訂正するかのやうに、
「さよなら、エルネスト、また直ぐね。」
といふのであつた。

一七

彼女が苦しみ悩んでゐるのを、信者に見させることに誘つたその言葉を聽いて、私は戦慄した。しかも、彼女は苦しむことに附け加へて死ぬといふことを言つたのだつた。ル・ガリツクの方では、その言葉をオルテーグ先生にだけ適用したのだつた。私はそれが彼女自身にも適用されるものであることを理解してゐた。彼女は又もや自殺意志を斷言したのだ。それに對して、段々悔恨が混つて來てはゐるが、私は用心からして相變らず何も口出しをしないでゐた。突然この負傷者の中に、私には迚もできないと感じる程の働きの役目が潜んでゐることを私は見屆けた。彼は八月初めから巴里を出發した母を除くと、一番夫人に近い親類の人だつた。私は一時マルフアン・トレヴイス未亡人に手紙を認めようかと考へた。かやうな例外的の性質の夫妻の悲劇中に、あのエゴイストで不聰明な姉人を加入させることは何うかと想つて、見合せることにした。私はオルテー

グ夫人の懺悔を聞いた時得た證據を思ひ出した。情熱に對して推理のできないことと、奔放な精神を支配するのには、別箇の精神の、使徒の力のやうなものを注ぎこむ必要のあることを想ひ出した。その力を私は目前に見たのだつた。この士官の確かりした顔、苦しみの中から心の光の出てゐるその眼を見、彼の出征の時の言葉と、唯今の話を憶ひ出すだけで十分であつた。彼の信じたことを信じて、それにこの誠實さをもつてしたら、この人は心中を怖しいことだとするだらう。それを妨げるために、何もしないことはあるまい。あゝ私はその事を告げる權利はなかつた。半ば無意識的に、失禮ながら、しかも、全く豫期しないで掴んだ祕密を裏切る權利は、私にないのだ。從姉の夫人を室外に出させることになつた彼の數語は、その性格の深い理解を殆ど神の力で私に示したのだつた。彼が彼女を愛してゐたのが、何れ程だつたかを知つた後にも、私はそれについて、さう驚きはしなかつた。彼はまづ私に質ねた。

「で、君、マルサル博士、君の御意見は何うですか。同じく全然否定ですかね？」

「否定しませんが、肯定以上でもありません。心の世界のことに關しましては、私は夙

くの以前から、中世パドワの醫者の言葉をモットーとしてをります。それはかうです。『予は八十年を生き、根氣よく研究した。しかし、予は予の無知を知らなくはない。拉丁語のイグノランチアム・メアム・ノン・イグノラーレだ』です。」

ル・ガリックは言つた。

「謙遜といふことは信仰の半分だ。しかし、可哀相な從姉のいふのを聞いたでせう？彼女は苦しんでゐる自分を見てくれと言ひながら、あの通りに遁げ出したのです。え？その苦しみですか。それに堪へて行くのに實に力が乏しいのです。信仰の顏のやうな平靜な顏をしてゐて、誇りだけで苦しんでゐるのです。しかし、假面だけは絶望をかくすことをします。カトリーヌは誇りの理論だけを有つてゐても、誇りはないのです。若い娘の彼女は、父を崇拜してゐました。彼女は父の通りに考へたのです。今日のところ、彼女は良人を愛し、良人のやうに考へてゐます。彼女の人格は、何時でも誰かに凭りかゝる必要があるのです。女ですね！　オルテーグがゐなくなつたら何うなるのですかね？」

看護婦が入つて來たので、その會話は遮ぎられた。夫人が看護婦を伴れて來たのだつた。夫人も、私も、一緒に今度は外へ出た。先刻の彼女の言葉は、怖しい場面のあつた日のオルテーグ先生の事務室の戸の背後で感じたあの煩悶を與へた。それは恰も彼女が堂々と自殺契約書を讀み直すのを聞いたやうだつた。さうして、その時のやうに默つてゐることはできなかつた。

「レントゲン室へ行きませう。板を整理しなければ。」

と、彼女は私に言つた。私は彼女の後に跟いて行つた。さうして、突然部屋に入るや否や、

「貴女はお從弟さんに、苦しんで死ぬ者を見ろといふことを仰しやいましたね。死ぬといふことをね！　では相變らず、同じ怖しい決心をしてゐらつしやるのですか？」

彼女は私の顏を見なかつた。さうして、板の澤山載せてあつた机の方に寄つて、單に

「相變らず。」

と答へながら、それに手を下しかけた。

私は彼女の表面の平靜にも拘らず、その手が少しく震へてゐるのを見て取つた。その氣持は私をして大膽に話を續けさせることになつた。殊に彼女が私をきつぱり止めはしないだらうと想つたからだつた。

「奥様、私が約束を守つて來たといふことをお想ひ下さるでせう。私は決して先生に申し上げませんでした。奥様にも三週間この方あの話を繰返さうとは致しませんでした。」

「さうね、あなたは友達らしく振舞つて下さいました。それは解りますわ。感謝してゐますわ。」

「ではね、奥様、あの時申し上げたことに戻りますが、唯今のところ奥様のおいのちは奥様だけのものではありませんよ。お從弟のル・ガリツクさんのお話をお聞きでせう。お會ひにもなりました。他の負傷した方々よりも、尙一層、私共のために戰つてゐる人達を生かしてゐる氣持が、あの方によつてよくお解りになつたでせう。また貴女御自身の個人的悲劇は、この大きな悲劇に較べると、ほんとに小さなものではございませんか？……」

「さうかも知れません。でも、これは私のことですもの。」

彼女のかく遮つて言つたのに對して、私は言葉を續けた。

「まあ！　貴女はそんな風にお考へになる權利のないこと、徹底的に私共が擧げて參加しなければならぬ誰しもの、この大悲劇から拔け出る權利のないことをお感じになりませんか。御決心を眞正面からよく御覽下さい。御主人がお氣の毒でしたから、多少の歡びをあげようとなすつたのでせう？」

「私が歡びをあげはしなかつたでせうか？」

「やつぱり左樣でせう。ともかくダンケルクからベルフオール迄の戰線を想像してごらんなさい。何十萬といふ人が其處にゐるのを想像して下さい。その人達は貴女に御主人のあるやうに、妻があります。子供も、母も、父もあります。彼等には將來があるのです。それを皆さし出してゐるのです。彼等は肉體では苦しんでゐます。泥の中で、砲彈の下に寢てゐます。彼等は心の中でも苦しんでゐます。ゐなくなつた者のことを思ひ、潛かに泣いてゐます。でも、進まねばなりません。『塹壕から梯子を傳つて外へ出るこ

とは死刑も同じだ』と負傷者のいつた言葉を想ひ出して下さい。でも、彼等は共處に上るのです。誰の爲かといへば、フランスの爲です。しかし、フランスは取りも直さず、フランス人の運命の總和です。それは私どもです。繰返して申せば、それはすべて我々の田舍であり、町であり、巴里であり、巴里を作つてゐるすべての家々です。聖ギヨーム街のこの療養所です。エタ・ジュニの貴女のお家です。その總てをこの人々が血を流して守つてゐるのです。御良心に訊ねて御覽なさい。彼等がこの大きな英雄的の努力をしてゐる四方の壁の中で、心中などのやうな愛慾の事件が可能でございますか？　私どもはそれではこの努力を破ることになります。若し私どもが銘々その爲に一層善い價の者にならないやうでしたら。」

「貴方の言葉は百倍も道理のあることです。でも、私は約束をしたのです。」

と、彼女は答へた。

彼女は返事の言葉をいふ暇がなかつたのだつた。何うして考へないものか。若し誰かその約束の言葉を彼女に返してゐたら、彼女は救はれただらうか。誰かとは誰のことか。

それは、その言葉を示唆した人のことで、この瞬間、その人の足音が廊下に聞えた。差向ひで對面してゐては、段々昂奮が募ることになるかも知れず、第三者がゐあはせたら、測り知ることが或はできやう。要するに第三者がゐて、脱線するのを制止する機會があつてこそ、互に說明の端緒（いとぐち）ができるのではないか知ら？　しかし、院長の先生が戸を開けられると、直ぐ私はその眼つきで、先生の樣子が最も惡い時だと察した。そして、私は先生の言はれる言葉に耳を傾けた。

「マルサル君、考へたが、明日まで待たして置く必要はあるまい。レントゲンにしてもね。君、ロージェルに電話してくれたまへ。挫けた骨を探すのでもないがね。手術の方は中止した儘で行かう。　こんな衰弱ではね！……あんな平靜な若者だつてね……。あゝ！　本當は神經がないんだ。あれの腦生活は覺めなかつたんだ。こんな穩かな、單調な環境、宗教の學校、サン・シール、兵營、何時でも規則だ。これはと言ふことは一つもなく、印象も變つたことはなかつたのだ。この種の人間は生存を續けるのに至極適當だ。これは珍しい例を我々に見せたもんだ。先祖返りの考へ方で、彼の場合では、型通

りで、それを何んな事件にも調子を合せて行くんだ。これは今日の役に立つよ。」
「しかし、それが役に立ちますかね、先生。」
と、私は進んで反對した。
「あゝ、彼の精神機關には氣をつけて觸はらんだね。それに觸はつたら大變だ。科學的見地に、あの腦を置いて見ることは不可能だ。あれは抑も非人間的のものでね。ル・ガリツクのは、反對に、人間としての運命が唯一の問題だよ。あれのは宗教思想の中軸だ。科學の中軸と言つたら、目的論のない法則概念だがね。科學ではわれらから見れば、唯副症狀的のものだ。ル・ガリツクのやうな男には、靈魂といふものが抑もの實在なのだ。話の合ふ方法はないね。」
「苦しんで死ぬ人間だつて、一つの實在でせう。」
と、夫人は言つた。
「これは一時の彼の機關の狀態だ。その機關其物も小さな心的化學の事實で、始めもなければ終りもない運動によつて運ばれて來たものだ……。だが、マルサル君、遺傳は偉

い力のものだね。僕の家内を見たまへ。爺から、僕から、物理的、精神的の世界、宗教のそれと科學のそれとの二つ圖景のあることを承知してゐるんだよ。その二つの圖景の中で、一つは夢によつて描かれ、他方は自然によつて描かれ、双方が妥協のできないものだといふことを知つてをり、一方が眞理なら、他方は誤りだ。家内はそれを知つてゐるのだ。ところが、家内と一緒に育てられた一人の親類を今見たのだ。それが負傷者だ。家内は昂奮した。その幼い時の印象が甦つたのだ。十五年前の彼女の人格が、一時今日の人格と重なり合つて、もはや氣の毒な子の思想の、あの善良な神——善良だといふのだね——を想像する思想の亂暴なことに氣がつかないんだ。その神樣が彼の手を取つて交通塹壕の中に引張つて行つて、エッセンで神意によつて作られた爆彈を受けたんだね！　さうだね、あんた。」
今度は夫人に向つて話しかけて、
「馬鹿だね、馬鹿の骨頂だね！」
先生がこの言葉を言つて、皮肉な笑ひを笑つた時、茫然(ぼうぜん)したことは、夫人が啜り泣き

を始めたことであつた。

先生は叫んで、

「おい、おい、カトリーヌ、何うして泣くんだ？　勘辨してくれ。マルサル君、これは内緒の場面だからね……だが、何うしたんだね？」

「そんな世界觀はあんまり辛いことですわ。それだけですの。でもあんまり苦しいことですわ。」

「可哀相なお前さん！　これはね、療養所にゐることを少しでも氣輕くしてあげようと思つてのことなんだからね……マルサル君、だから、直ぐロージェルにレントゲンをするんだと電話してくれたまへ。確實にね。」

一八

何たる場面、如何程意味の多いことであつたらう！「可哀相なお前さん」といふ時の、オルテーグ先生の聲には、いぢらしい戰きの響きがあつた。夫妻が眞に怖しい計畫をしてゐたからだらうか。二人は再度語り合つてゐたのだらうか。何時だつたらう？　どんな言葉だつたか。何うしたらそれが知れよう？　二つの事だけは確かであつた。たつた今、夫人は、私の異議に對して、唯一聲、「約束をしたのです」といふだけだつた。先生の方は、彼女の溢(こぼ)した涙に對して、またあまりに酷な世界觀に泣崩れた時、ほろりとした氣持だつた。先生は彼女の氣が遠くなりはしないか、自然の法に負けはせぬかとあはれんだのだつた。で、その言葉が出たのだ。幾度か、療養所の回診の時、眠つてゐる負傷者の枕元で、先生の繰言を聞いた。「苦しんでゐる人間がたゞ自然の法に負けた時は、可哀相なものだね！」と。自殺に對して妻が怖しくなつたのを見たら、それで十分

ではないのか知ら。さうして、その時には、多分知らずにではあつたが、利己主義と悲慘なぞつとする狂氣沙汰の裡に、わが身から夫人の心に起こさせた誘惑を第一に押止める人ではないだらうか。さうだ、そんな事も昔のオルテーグ先生だつたら、眞實のことだつたらう。あの立派な科學人で、今まで私の氣づいたことだが、他人を愛する心の盡きない、涸れない泉が、絶えず流れ出て來る勝利者だつたのだから。それは先生の生れつきから出たのだつた。勤めの同僚が、先生のことを「大將は葡萄酒のやうに人が善い」と言つたことがある。この言葉は昨日のオルテーグ先生を想ひ起こさせる。今日の先生は、骨と皮の瀕死の人で、眼は据り、藥で衰へ、時には夢現で、時には疳癪が起り、疑ひ深く、はつきりした頭腦の、驚く程永續きした以前とは、共通のところがなかつた。先生の感情的の部分も害ねられて無くなるまでになつてゐた。飽く迄も強情な所から、病院を去ることを拒んでゐたが、それも最後の運命には次第に近づきつゝあつた。自働車ではあまり疲れるので、今では聖ギョーム街に寢起きしてゐる。二六時中共同生活をしてゐることは、弟子の私には、肉體の崩壞よりも一層痛ましい、先生の精神が崩れて

行くのを、あまりにもよく認めさすのであつた。私はその日その日の經過を辿ることができ、ル・ガリツクが療養所に着いてから早速、その惡くなる經過の線にがた落ちのあつたことを認めた。

翌日レントゲンの成績と、私の診査とを持つて行つた時、患者に向つては見せることの全くない先生が見せられた皮肉の中に、私は始めて證據を得た。

「碎けた骨はなくて傷の始末がついたら結構だ。彈丸は信じた通りに直後頭部内だ。時を待たぬといかん。ル・ガリツクはまあ一番良い條件にゐるんだ。骨て働いたことのない頭腦だからね。えゝ、君、彼に考へさせたら、驚かすことになると想ふかね？」

先生は冷笑の色を、八月の最初、この士官が此處に立寄つた時と同じやうに始められた。あの時は、病人の神經的な焦れつたさに過ぎなかつた。今日齒を剝き出されたのは、憎惡に近い意地惡さが現はれてゐた。その上目つきにも憎々しさが見え、翌日には一層それが强かつた。

私どもは一緒に鈴蘭の部屋に行つた。オルテーグ夫人は入口の側に立つてゐた。私どもの方へ來て、

「直ぐは駄目よ、エルネストはクールモン師に會はせてくれつていふので、私、今伴れだつて來たところよ！」

と言つた。良人は、

「それでは今あんたを探した時、其處にゐたのだね？……」

と問うた。

「さうですよ……。」

先生は何もつけ足して言はなかつた。廊下の大きな窓に凭りかかつた儘立つてゐて、明かに焦れつたさうに、玻璃戸の上をこつ〳〵と叩き出して質ねられた。

「マルサル君、一昨日の、一寸したことに麻酔をかけてやつた時、ル・ガリツクはもう教父さんに會つてゐたかね？」

「はあ、さやうです。」

と私は答へた。

「教父さん、遊んでるんだね！」

と、先生は肩をすくめて言つた。それから愚弄するやうに、

「戰場に行つたばかりの兵士の懺悔は、どんなものかね？」

「兵のものではありません。」

と、夫人は遮つた。私も口を出した。

「他人のことでしたら、先生、寛大に見ておやりになつて下さい。何日か仰しやいましたのは本當ですよ。我々のために彼等は戰つたのですから。」

「フランスの人口を殖やすからつて、僕は彼等を批難する者ぢやないよ。」

と、先生は更に冷かした。

「ともかく、僕等のバヤール君は若い時の過失を長々と語ることがあるんだね。——さあ行かう。濟んだよ。」（註。バヤールは十五、六世紀に亘つてのフランスの善良な名將。）

鈴蘭の部屋の戸は教悔師の出るので開いた。教父クールモンは六十歳の、極く背の低

い、ひどく痩せぎすの、それでも瑞々した紅い顔で、金縁の眼鏡の奥から、子供のやうな、若々しい蒼い目が輝いてゐた。漸く白くなりかけたブロンドの髪は、顔に焔のやうに落ちかゝつてをり、始終興奮してゐる熱心さで、顔が生々してゐた。顔の無邪氣さは、目をぱち〳〵させ、宏大な善の心で練られ、聰明さの見える微笑で、聖職者らしい心づかひの補ひをしてゐた。この人はノートルダーム・デ・シヤンの助祭の地位から得てゐた寛大な評で、巴里の教界で知られてゐた。その理由からオルテーグ教授は、彼を療養所に迎へたのだつた。先生はこの聖職者に信仰が多く、極端の寛大さがあるので、いさゝか當てが外れたのだが、それは宣教師らしいことであつた。私どもは、師に眞に使徒らしい慈善の特色のあることを知つてゐた。動員令の下つた時、彼は大停車場のある所に立つてゐて、兵士達と語り、さうして、幾百人もに懺悔をさせる便宜を見つけた。ふだん、オルテーグ先生は、こんな人物を異つた世紀の人とし、好奇心の面白さで眺めてゐた。この日は、意地の悪い嘲笑が瞳の中や、口の周圍に漂うてゐた。それだのに、この優れた老人は、非常に熱のある眞情を吐露して、

「あゝ！　奥様、お従弟のル・ガリツクさんは聖者様見たいです。ほんとに福音書にある軍人さんですね。」

「おゝ！　教父さん！　従弟は英雄だと言つて下さい。それが正當ですよ。しかし、戰場から歸つて來るある者には、福音書ですかね！　私はそんなにこの書物は讀みません。本屋で素晴らしい成功だといふことは祝ひますがね。それでも、山上の説教のあるものは覺えてゐます。平和なる者は幸福なり、神の子と呼ばるべければなり！……さうではなかつたですかね？」

「さうです。しかし、またローマの百人隊長もあります。ル・ガリツクさんのやうな中尉さんは、われらの主なる神は、その僕を癒したまひ、彼を崇めたまうたのです。と申すのは、先生、主は彼を崇めたまうたからです。神の子はかう言はれたです。イズラエルにかく多くの信仰を見しことはなかりしと。よくこれを注意して下さい。富んだ者に向つては、汝の富を棄てよと申されました。百人隊長に向つては、汝の聯隊を去れとは申されません。さうして、その百人隊長こそ《主よわれら値ひせず》と言はれたのです。

軍人のこの言葉を、祭司は毎日聖體拜領の前に祭壇で繰返すのです。その軍隊こそサン・シュルピスのお寺で、最後の言葉をいふ者であります。」

「福音書が軍隊化されましたね。私の療養所のやうですね。百人隊長の召使が、私どもの可哀相な従弟のやうに、頭に砲彈が殘つてゐても同じですかね。ナザレのルブートゥーは時機を失ふでせうよ。正直のところ、教父さん、あなたは貴方の仕事を成すつた。私どももわが仕事を致しませう。私どもも百人隊長の所へ這入りませう。カトリーヌは？」

「教父さんを少しお見送りします。」

と、夫人は答へた。明かに先生の唇に、「斷りはしないんだな」とは、口にこそしないがその言葉の意味のあることは讀めた。先生は神經質に眉をひそめることだけで滿足した。それを夫人は命令のやうに解した。教悔師と二言三言言葉を交す暇があつたか何うか知れない裡に、彼女は、私どもが部屋に入つた時に一緒になつてゐた。

一九

負傷者は仰向けに寢て、萬年筆で何か書くことに耽つてゐた。彼は前日のやうに憔れながら、立派な顏に、常ならぬ威嚴を保ち、澄んだ夢を見てゐるやうな目に、唯ならぬ焰を湛へてゐた。

「將校殿。現場を捕へたぞ。これは！　規律ある人には醫者の掟は物の數でないのか。然りか、否か。絶對に休息を命令して置いたではないか。然るに君は働いてゐる！……」

「これは仕事ではありません。幼友達の一人の死影に對して、多少の想ひを寫し取つてゐたのです。カトリーヌさん多分覺えてゐるだらう？　よく舟に乘つたフランソア・ドラノーエを。」

と、彼は言つた。

「覺えてゐるわよ。死んだの？」

「僕の脇で死んだのだ。この十八日間、およそ英雄らしかつたんだが。僕はレンヌの新聞に彼の最期の様子を短かく書いたのだ。彼は辯護士となつてあの町に住んでゐた。後になつて、その頁があまりなつてゐないし、あまり生硬だと思つたので送らずにゐたのだ。」

「其處にあるの？」

と、夫人は尋ねた。

「あゝある。大したものではない。」

彼は紙入から二三枚引出して、新約と祈禱書との間に、床の上に並べた。

「あんたはこれを聲を出して讀んでもいゝ。」

と、紙を展げながら附足して言つた。

「この物語はオルテーグさん、われらの兵隊といふ者は何んな者か、マルサルさん、あなたにもお解りでせう。ね、彼等は愛すべき者だ。彼等の任務は酷い。どんな心で彼等がそれを遂行してゐるか、あなた達に解るでせう。僕は塹壕の中で、ある男が他人に向

つてつて言つてゐるのを聞いた。

「若し砲火の方に歸らなければ、名譽の十字架だ。」

「さもなければ木の十字架だ。」

と、他の一人が言つた。

すると、最初の男が、

「同んなじことだ。」

と言つた。

しかし、まあ讀んでくれ。」

オルテーグ夫人は紙を展げて讀み出した。私はこの戰爭中を通して、この優しい婦人の震へる聲で、死の前日に、一戰士の前で想ひ起させた荒くれた突擊以上に、鋭い感じを抱かせたものがあるとは想はれない。その聲は、極自然に士官によつて用ひられた（それといふのは、事件の幻が生々しく全部彼に甦つたから）專門語によつて句切られてゐた。彼女はほろりとした心持になつた。あまりに酷い行の所では呼吸をつまらせた。

だが、次の頁はル・ガリツクが、前に眞直に行く手で、男らしい脊の高い文字で、冒頭から書いてゐたものだつた。

フランソア・ドラノーエ

證　言

彼は英雄らしく死んだ。彼は僕の幼友達であり、兄弟であり、一週間前から僕の軍曹であつた。あはれな小さな者よ。

あゝ！　美事な攻撃よ。用意は細心に整へられた。

隊長の時計は、互に正しく合はされた。朝の五時に、われらは發火信號無しに塹濠から飛び出さねばならなかつた。兵は背嚢なしであつた。各自二百發の藥莢。雜嚢には一片のパンと手榴彈十箇。水とコーヒーで一杯の水筒。征服した塹濠阻絶のために空の土嚢五つを脊に括つた。

出發する前に、各目濠から外へ早く飛び出せるやうに、革帶に附けてある道具を利用

して足場を堀る必要があつた。次には一發の銃聲もなかつた。一同銃劍だ。彼方に着けば、手榴彈と短劍だ。

五時十分前に僕は言つた。「出る、準備はいゝか？　氣をつけ！」

その時もう一度、僕は腸が引緊まるのを感じた。恐怖の證據ではないが、人間の力では抑へられない程で、手足にじめ〳〵した熱の氣味がある。全く人間の力でなく、神の力だ！　ドラノーエと僕は、前の日に聖體拜領をした。彼は僕の傍にゐた。囁くやうに、彼は言つた。

「今日はやられる。きつと。」

「恐いのか？」

笑ひながら、僕は訊いた。

「さうぢやない。僕は生命の値打を、嘗てこれ以上に知つたことはなかつたのだ。神聖な原因のために投げ出す時の生命は、實に立派なものだ。神をこんな現實のものと感じ

たことはないのだから、死ぬことが、これ以上容易なことは嘗てなかつたんだ。」

彼が話してゐる間に、徐々に日の薄明りでぼんやり彼の姿が浮き上り、幽靈の美しさが見えた。その明るさが、我々の周圍にある軟かな、濕つぽい霧を追ひ拂つた。それは鐵條網の杭や蒺藜から死衣のやうに流れ出てゐた。夜中に工兵が作つてくれた通路が、はつきり見えてゐた。

ドラノーエは突然言つた。

「ね、故郷の鳥だ。」

僕は、小鳥が、初秋の冷たい朝の夜明を祝つてゐるのを聞いた。

すべてが遠く、鼠色に見えた。僕には目標が一つも目に入らなかつた。三百メートルの所に、彼等の塹壕が地とすれ〳〵に、その目の黑い大きな口を開いてゐるのを察してゐた。密集して十分見張つてゐる銃眼が泥灰質の盛土に孔を明けてゐた。僕は前の日に

双眼鏡で地面の目星をつけて置いた。中堤や引込線に近づくことを不可能にしてゐるところの、彼等の四つの機關銃の、正確な位置を知つてゐた。

若し不幸にも、我等の重砲が攻擊時間に最大限の勞力を供給せず、若し芒のある彼等の鐵條網が、依然突立つてゐたら、それこそ數學的のもので、われらは悉く薙ぎ倒されるのだ。

ドラノーエは、僕と劣らずそれを知つてゐた。彼はまた僕に言つた。

「銃劍で三百メートルは無茶だ。だが見ろだ。」

彼は僕に約二百メートルの所に、伏せの兵を庇ふために要するだけの、死角を辛うじて與へてゐる地面の皺を指した。それは再出發をする前に、第二の增援隊を同じ所に達しさせる時間となる目つけものだつた。彼は附け足して言つた。

「われらは運が好いぞ。」

五時五分前、「劍附け！」だ。

長い鋼鐵の閃めき、火花の打突かり、拳は銃を固く握りしめる。ドラノーエと僕は、兵を見てゐる。

あゝ！　苦痛と希望の三箇月の戰友、一擧に熔鑛爐の中に飛び込まうとしてゐる名もなきわれらの戰友、汝の青銅色の骨ばつたあはれな顏に、如何に接吻してやりたいことか！

熱と青春の充ちたそれらの者は、今にも壺れようとするのか。

丁度その時、恰かもある流れが僕等の思想を合せたかのやうに、僕の手を握る彼の手を感じた。

「エルネスト、訣れだ。」

「フランソア、失敬！」

と僕は答へた。しかし、彼は再び、しかも、重々しく、

「訣別だ。」

五時だ！　五時だ！

「一同、フランスの爲だ、進め！」

一氣にすべての軍帽、すべての銃劍、すべての胸が、薄闇い塹壕から躍り出た。高い草を仆して密集した一線が動搖いた。

彼等は我等を見つけた。

た！　た！　た！……機關銃は休みなく飛んで來た。彈丸はわれらの眞正面に降つて來る。

「もつと早く！」あゝ！　肉の打貫かれた鈍い音、たしかに骨の破れた音、息詰まる叫び、ボーシュ（ドイツ兵）を呪ひながら、轉げる隣人の最後の罵り！

「もつと早く！」今や彼等の發作的、狂氣の阻絶の射擊だ。榴霰彈は頭から三メートルの所で破裂し、降つて來る。

「もつと早く、皆やつつけろ！」

「伏せ！」それは一分のかくれ場だ。仕合せの土堤で。平つくばひに、默つて、息をこ

らし、また呼吸をしてゐる。
「ドラノーエ！」
あゝ、ドラノーエは血を出してゐる。彼は蒼くなつてゐる。血が頬から藤色外套の上に落ちてゐる。
「やられたか？」
「顎を抜けた。何でもない。」
「貴様退け、繃帶をしろ！」
「退く？　笑はせやがる。決して。」
「貴様退け！　貴様の中尉が命令するんだ。」
「貴様の友人としての俺だ。殘つてをる。貴様と離れるものか。」
既に！　増援隊が迫ひつき、新手が押寄せて來た。二度目として、僕は起ち上り、部下に叱鳴つた。

「立て！　前へ！　元氣を出せ！」
その時は全く殺到で、吼えてゐる龍卷だ。百メートル全速力だ。數秒だ。「前へ！前へ！」額を低く、胸を彈ませ、齒を喰ひしばり、躓きながら、今や目に見え、引つ切りなしに死を吐出してゐる白い線の方へ運ばれてゐる。「前へ！……前へ！……前へ！……」さうして、それこそ飛び込み、沈み、崩れ落ちる肉體の衝撃、摧がれ、歎願し、塹濠内を逃げ廻る者の肉體を劍の先で突き刺す、怖しい肉彈戰、刀での突撃、負傷者は自決する。
「左を防げ、早く、早く！……」
「カメラード！　カメラード！……」
「人殺し、卑怯者！　泥棒！　ルーヴァン！　テルモンド！　銃眼！……大フランス萬歳！……」
……
輝く太陽、神の太陽、平和、勞働、キリスト教の偉大な日の太陽が空に登つてゐた。

さも、われらの勝利のために輝いてゐるとも言へさうだつた。到る所に沈默、怖しい時の後の沈默、野原に仆れた幾多國人の打慄ふ現在では、もはや決して滿たされることはなからう。その沈默の中で、僕は苦しく咽喉を涸らして呼んだ。

「ドラノーエ！　ドラノーエ！　ドラノーエ！……」

僕は地に顏を向けて倒れてゐる彼を見出した。その軍人らしい可哀相な誇りの顏に、死が附纏つてゐた。其處にはまた手榴彈が彼を斷ち切つてゐた。しかし、スカプラリオの紐には觸れないで、彼の胸の上にイエズスのサクレ・クールは搖いでゐた。（イエスの御心こそ御身の中にて死ぬ者の希望なれ。われ等を憐みたまへ。）

「僕はまだ一つそれを忘れられない理由が一つある。」

と、彼の從姉がその手紙を返した時、ル・ガリックは言つた。

「あんなに愛してゐた息子の顏の變つたのを、彼の母に見せたくなかつた。今、兄さんに叱られた些細な勞作は、實は彼女が僕に荷はしたのだ。しかし、これも濟んだ。ドラ

ノーエ夫人はこの覺書を息子の部隊のすべての者に贈りたいのだ。カトリーヌ、どんな風に彼が死んだかわかつた今、僕の選んだ文句が適當か何うか言つて貰ひたい……。」

彼はオルテーグ夫人に、別の一枚の紙を渡した。彼女はそれを今度は默つて讀んだ。彼女はそれをこの負傷者に返さうとした。その時先生は口を挿んだ。

「信仰の無い者でも讀んでいゝかね？」

「無論です。マルサル博士も。」

今度こそ私はそれを讀んだ。その晩私はその文を寫した。私はありの儘に轉載したのだ。私もル・ガリックと同樣に證言を纏めるのだ。私は死の問題を解釋する二樣の資料を持つてゐる。ブルターニュ出の士官によつて、戰友の死の記念像のために選ばれたこの文面は、すべての註解よりも優つて、その二樣の一を代表してゐる。この戰鬪の物語に並べて、それは問題をはつきりさせ、解らせてくれる。私にはさう想へるのだが、ドラノーエとル・ガリックのやうな人達のすべての心理を約めた天啓的のものとして、われらは其處に有つてゐるのだ。といふのは、彼等はわが軍の戰士だし、福音書の隊長で

あることは、教父もさう呼んだことであり、ル・ガリックは一種の人間として完成した型を、彼の身に實現してゐる程で、行爲の中に全意志を、祈禱の中に全信念を盛り、行爲が彼等を祈禱に、祈禱は彼等を行爲に導いて行く人の類だ。この精神狀態の象徴は劍で、戰爭の具であり、その時には、拳でそれを握るのだ。休息の時や、地に立てられた時は、それこそ十字架だ。かういふ個人は、オルテーグ先生のいはれるやうに、純粹の先祖返りの遺傳だらうか。それならば、最大國難の時、國は何うして彼等の中に、その要求する働き手を、間違ひなく見つけ得るのだらうか。何故、彼等の精力が、その作つてゐる社會の、生活の爲になる最大の必要と一致するのか。何故、彼等の感じかた、考へかたが、民族的の機體から最も力強い效果を得るのだらうか。死の記念の畫像のプランの冒頭に、ル・ガリックは、傳統的の格言と十字架とを描いてゐた。「この印により て」(in hoc signo……) そのあとに次の文句があり、一々その出典が附けてあつた。

われ等皆心の清き中に死なん　(マカベ書)

＊

上長に服從してゐる私は、同じ命令の下に兵隊を有つてゐる。私は甲にいふ。「行け」、さうして、彼は行く。私は他の者に言つた。「來れ」、さうして、彼は來る。また私の從者にいふ。「これを成せ」、さうして、彼はこれを成す。　(聖マタイ)

＊

しかし、彼はわが罪のため突通され、わが犯せる事により破れた。われらに平和を與ふる罰は、彼の上に課せられた。彼の痛手により、われらは癒えた。　(イザヤ)

＊

他の者には詰まらぬと見ゆることも、自ら美しと思ふことを成せ、軍の神よ。あゝ寔に汝、この犧牲の中にあらば、予の惡しからざることを敢て見よ。また予も亦わが生命

を思想のために獻じる價がある。(『武器の叫び』より。腕に珠數をかけ、敵に殺されたわが友中尉エルネスト・プシイシァリ、ルナンの孫。)

＊

希望を墓にかける者に祝福あれ。(ある教區の者につき、テーヌの女の手により書かれたもの。)

＊

キリストの苦しみわれらに多くこもれると同じく、また同じくわれらの慰安キリストにより夥し。　(聖パウロ)

＊

イエス・キリストはわれらの中に受難を完成する。　(パスカル)

オルテーグが私に覺書を渡しながら言つた。

「僕はパスカルの腦の解剖報告を何處かで讀んだ。エルネスト君、君のためにそれを探さんけりやならん。しかし、正直のところ、必要な殺戮の場面から報告は摑めない。その場面の勇敢さは僕も認めるよ。また君が僕達に書いたことも認めるがね、亂暴だよ、先驗的理想主義のこの宣言はね。」

「でも、その中にその一つだけはあります。」

と、ル・ガリックは言つた。

「何だね？」

「犧牲です。」

オルテーグ先生は返事をしないで言つた。

「それからだ、若しドラノーエ夫人がこれを讀んで、多少でも慰安を得るならば、僕はそれを悪いとは想はん。その代り、こんな文句を探すために、君が澤山書物を見るとい

ふのは、大きに悪いことだよ。僕の望むことは頭腦の絶對安靜と不動といふことだ。それといふのは、書いては君が酷く苦しいに相違ないからだ。後頭部内の神經扇に一つの傷害があるのではね。今朝君にモルヒネ注射をしたらうね。分量は？」

「それを拒んだのです。」

と、オルテーグ夫人が答へた。

「何うして拒んだんだ？」

先生は訊ねた。

「はあ、痛みは酷いですが、堪へられます。それは堪へられるくらゐですから、大したこともないです。それを無くするよりもです。覺えていらつしやるでせう。兄さん、僕が此處にお訪ねした時、わが爲に、またできるならば、他人のために、償ひをしなければならぬと言つたでせう？　ですから、苦しみを意識しない人の爲にしかならぬ時にも、僕は苦しみの力を有たうと試みるのです。」

突然、オルテーグ先生の暗い顔に、痙攣の色が見えた。

「誰に君はそれを言ふんだ？」

と、ぶつきら棒に言つた。

「誰つて特別にないです。」

「いや、僕にだ、僕にだ。それは誰かが君に話したからだ……。一體誰が此處で話したんだ？」

眞に激しく怒つた樣子だつた。先生は私に歩み寄つて、

「マルサル君、君か？」

私がさうでないといふ樣子すら見せない内に、

「さうぢやない。君は忠實だ、君は。」

それから夫人の方を振向いて、

「カトリーヌ、お前だ、お前だ。お前はもうこの部屋にこれ以上一瞬も居るんでない。二度と顏を出してくれるな。解つたか。嚴禁だ。出て行け、出て行かんか！」

オルテーグ夫人は一言もなく、何の様子も見せず、言ふ通りにした。後の三人ともこの何ともいへない爆發に茫然としてゐた。中で、それを敢てした者は、既に恥づかしく感じてゐた。彼は腰を掛けたが、まだ震へてゐて、私どもの顏を見なかつた。私はル・ガリックも、何か變な氣になりはしないかと案じてゐた。彼は眞赤に、やがて眞蒼になつて、痙攣に襲はれながら早速それを鎭めた人のやうだつた。オルテーグが、先づ殘酷な啞のやうな沈默を破つて、さもこの部屋に回診に來たかのやうに、傷者に向つて言つた。

「脉を見せて貰ひたいね、エルネストさん。」

先生は手袋を取つてゐた。斑點で黑くなつた彼の指が、靑年の白い手首に置かれた。

「結滯もない、休止もない。好い調子だ。寢臺に横になつてゐて何時も眩暈はないか？

良し、良し……よく解るか？　さうか……。壓迫感はないかね？　嘔吐もないね？……」

この質問はいづれも彼の內密の心配を告げるものだつた。表面は靜かでも、多分に危險のある苦の狀態に、併發症が俄かに酷い目を見せはしないかといふ恐れだつた。

先生は私に振向いて、手袋を舊のやうに嵌めながら、

「停頓狀態、つまり好いのだな。僕の診斷も同樣だ。全快の運がある。休息だ、尙休息だ、何時も休息だ。」

先生は起ち上つて、聊かためらひの樣子だつた。それから口髭の先を嚙みながら、更に低く、意見を押しつけられるやうな、肯定し、壓迫される調子がなかつたが、

「ある沈默は敎へてくれるものだね、エルネスト君。僕は君の場合がよく解つた。僕は甚い病氣だ。承知の通りにね。僕は何時も自分の神經を思ふ通りにはできない……。いかにも僕はモルヒネを使ふ。僕は苦しみたくない。僕の考では僕は正しく、君は君の考で正しいのだ。君が苦しむのも理屈があるんだ。僕のやうな一元論者には、苦痛は怖しい無駄なことだ。僕は何も恐くはない。苦痛には理屈はないと言ふだけだ。それはそ

れとして、僕がモルヒネを用ひてゐるといふことを家内が言つたかね？　言はなかつたかね？」

「決して聞かんです。僕は誓ひます。」

と、ル・ガリックは答へた。

「それを知つて、僕は確かめるべきだつた。僕は家内に悪いことを言つた。家内にね！……僕はほんとに情ない人間になることがある。エルネスト君。極めて情ない人間にね。僕は僕達の精神が、唯僕達の體の様子を知らうとするのに、こんな證據は要らなかつたんだ。僕はほんとに心の汚ないところがあつた。過ぎたことだがね。君、悪くは思はないでくれ。君の從姉が君の看護婦の一人になることを承知してくれ。お願ひだ。」

「兄さん、あなたは僕に全く淡白であつてくれますか？」

ル・ガリックはかう言つた。オルテーグ先生は、

「勿論だ。」

と答へた。私は先生の口もとに先刻の痙攣が襲つて來たやうな震へがあるのを見た。青

年士官は、反省と懸念との同じやうな調子で言ひ出した。

「それではですね！　强情を張らないで下さい。僕の祈りの中に、僕の最後の幾日かを、無益な不安で紊さないであらせたいといふ深い希望を入れることだけ承知して下さい。と申すのは、もう僕の最期だといふことを私は、あなたもですが、感じてをります。

（彼はオルテーグ先生の否定を遮りながら、）

あなたは今私に質ねられた時、診斷にどんなにか、逡巡の様子を示されました。要するに、（新しい否定を抑へるやうに、）

僕が最期の時に來てゐることはありもしないことでは無いです。準備をすることに、時を全部使へればそれで澤山です。辭世の言葉はまだ口にあるだけです。心の中でまだすつかり言ひ切つてをりません。心の平和が私に必要です。この際に、あなたは、あまりにも解りすぎる程の焦れつたさに負けて、それを今度は、寛大な心で懲らしめるといふ男らしい、氣高い光景を見せて下さつた。私は一生の中で、弱いところを見せた後に、高尚な方向に立戻ること、小さな方から偉大の方へ歸る美しい魂の特性を、常に見て來

ました。あなたが我慢ができないで、何故腹が立つたかといへば、それは、従姉と僕とが人並の親類友人以上であり、あなたがたの通つてゐられる試煉を、従姉が僕に告げたと想像されたからです。この敏感な心づかひは、再びあなたにあることでせう。それは至極當り前のことです。またとないことではありません。これだけで、僕が従姉さんを看護にお願ひしたくない十分な理由です。しかし、待つてゐることにしませう。

（オルテーグ先生には、次第に苛立つた様子が明かにあらはれてきた。）

明日まで待ちませう。僕はもうそれを冷静に話してはゐられんです。何も急ぐことではないです。」

「エルネスト君、君は僕が冷静を失つてゐたことを残酷に感じさせるね。信者としては、君は少し慈悲がないね。」

オルテーグ先生はかう言つて、出て行かれた。私もその後に跟いて行かうと用意してゐたら、その時、傷ついてゐた彼は、私を引き止めて、かう言つた。

「マルサル博士、用事を一つ頼まれて下さいませんか。クールモンさんは、今日午後は

不在だと承はりました。まだあの方が病院におゐでしたら、お歸りになる前に、今一度お目に掛りたいと思ひますが、誰かをさう言はせに遣つて下さると、甚だありがたいことですが。」

二

階段の上で會つた看護婦は、教誨師が中庭を今通つて行かれたところだと言つた。私は急いだ。彼はもはや門を出てゐた。漸くサン・ギョーム街とグルネル街との角で追ひついた。氣の毒な教父は、私が帽子もかぶらず、病院の仕事着の儘で遣つて來たのを見て、一寸當惑の色があつた。

「中尉殿悪いですか？」

彼は隊長にどんなにか關心を有つてゐるかを、私に示しながら尋ねた。

「いゝえさうではありませんが、お會ひしたいといはれるんです。」

そして、私は今あつた厭な事件を話しはしなかつたが、無論それが原因で起きたことに相違ないことは知れてゐた。私は負傷してゐる士官の殆ど切な、不安な願ひであることを強めて言つた。

司祭は簡單に答へた。

「まゐりませう。」

私の好奇心に、今彼はその無表情な顏を對立させた。それはよく私の知つてゐるもので、私どもがすべて診察の時に見受けるものだつた。一緒になつて歩いてゐる時、何の用意もなしに彼は尋ねた。

「先生、危險なしに中尉を何處か他の病院に移すことができないことはないとお想ひにならんですか？　例へば田舍へといふ意味ですが。」

「それはできませんね。院長が迚も許しませんから。一體何故です？」

「オルテーグ先生のやうに、神經質の、異つた確信の方とでは、互に葛藤が心配ですからね。ル・ガリックさんは偉い軍人です。にも拘らず、それと、その爲か、多分大變感じやすい心の方ですからね。」

彼はこの言葉を言つて私と別れた。その意味は隨分漠としたものだつた。その中に、また轉地の暗示の中にも、療養所にゐることが、教誨師にも、無論青年のあの人自身に

も、心配の無いことではないといふ氣持のあることを悟つた。從姉の良人と、思想の爭ひがあるといふ見透しが、士官の心の恐れを當然のことだと信じさせもし、そのことを司祭に通じたこともあつたのではないかと想つた。何故、彼はオルテーグ先生の話のあつた後に、早速今呼ばせたのだらうか？　彼の强烈な敬虔な念が、どんな不安をも話し置けるやうにしたいのに違ひなかつた。私はあの話のあつた時、聽きながら、彼の顏つきの、あの嚴肅な表情を突然想ひ出した。私はあの殆ど賴むやうな調子と、あの最期の日に必要な沈着のこゑの調子で話したのを耳にした。いやそんな事はあるまい。信者は無神論者と思想の葛藤を怖れはしないのだつた。彼は自分自身の心を怖れたのだ。私もオルテーグ先生のやうに「山上のある言葉」を想ひ出した。私は毎度すぎる程、自分自身馬太傳の五、六、七章を讀んだものだ。オルテーグ先生の皮肉を再び用ひれば、「本屋の莫大な成功」となつた古典的のその斷片を讀んだものだ。その一句が想ひ出された。私は深いその心理を描いてあるのと、思想と行爲との關係に放つてゐる光明とを常に賞讃してゐたものだ。「予は汝に告げん。善からぬ心持ちにて女を眺めたる者は、皆既に

心にてその女と姦淫したる者なり。」

「あゝそれだ。これが本當の動機だ。彼は愛してゐるのだ。」

この言葉が心の中で言はれたよりも早いくらゐに、それが確實のことと想はれて來た。さうして、部屋から部屋へと――これは午後のことだつた――午前の命令が行はれてゐるか、何うかを見廻つてゐる間に、私の想像は、療養所の悲哀から、遠く離れて彷徨つた。それは私をトレギエーに運んでゐた。其處はブルターニュの田舍で、カテドラルで聖化されてゐる古い町で、エルネスト・ル・ガリックとカトリーヌ・マルフアン・トレヴィス孃が十五の時一緒に彷徨つた所だつた。いとこ同志の過去に關する私の假說が再び實體になつた。それは判然して來た。遠い無邪氣な牧歌が、彼女の方では變つて漠とした追憶となり、彼の方では情熱になつたことが窺はれた。十五の時の青年と少女とは眞に同年同志であつた。彼等は互に愛してをり、さもなくとも、互に愛してゐるものと信じてゐた。二十歳の時には、この年の同じことは、もはや年月だけのことだつた。若い娘は結婚もでき、家庭を築き、母にも成れるものであつて、學問がやつと濟み、そ